家庭雜誌

第五十八號

日用百科全書

日用百科全書は家庭内外の必需を、平易なる文章と鮮麗なる繪畫とに由て、詳細親切に説明し、冠婚喪祭の禮法より、衣食住、衛生、看病、育兒、音樂、手藝、園藝、文通、旅行、商業、經濟に至るまで、總て本邦の生活に適實なるもののみを網羅したれば讀者坐ながらにして幾多專門の師に就き一々口授指南を受くるの益あらん

第壹編 和洋禮式

本書は非常の好評を以て發刊以來既に第三版を印刷するに至れり

第參編 實用料理法

從二位子爵北小路隨光君題字
式部長官從二位鍋島直大侯夫人題詠
幕府及諸藩料理師範石井次兵衛君題歌
幸田露伴君序文

全壹冊 正價金貳拾錢 郵税六錢

挿畫 極彩色口繪：武内桂舟〜寫眞〜●木版彫刻極密畫數十個〜銅版〜近江の琵琶湖●相洲江の島●お茶の水●市川の夕照●八百膳の雪景●玉川の鮎漁●國府津の鰹釣●廣島の船料理●王子の料理店●新橋の麗妓おゑんぽん太

實用料理法生れんとす、何が故に生れ出でたる。盛儀式の献立、大賓の饗應には、專門の庖丁家あれども、不時の來客、家長毎夕の食膳等に、庖厨を宰ざる細君の心を苦しめざらん便りにもと此書を世に出したり。故に此書を讀まば、師を求めずして、四季の料理は自在に出來得べき良書なり。

第貳編 茶の湯と生花

亦好評を得て再版出來す

日用百科全書目次

⊙第十三編より以下の目次は追て廣告すべし

毎月壹回發兌美裝一冊菊版二百五十餘頁

正價●壹冊金貳拾錢●六冊前金壹圓拾五錢●十二冊前金貳圓廿五錢
●郵税壹冊ニ付六錢宛●御注文は前金

發兌元 東京日本橋區本町三丁目 博文館

青年叢書 第三巻

市民

紙數百七十頁餘
定價拾貳錢
郵税貳錢

職分 大日本帝國市民は三個の職分を有す、(一)臣民として皇室に奉公す、(二)國民として列國民の間に聳立し世界的行步を試む、(三)同胞として列祖後昆に對し現代に盡瘁す、別言すれば忠君公德膨脹の三重の職分を荷ふ。國士に非らずんば此職分を完ふするを得んや。市民道德の素養を奉公、武士道、社會道德に求め。國民の半身たる日本婦人を高めずば國士を得ず。

愛國 國體の尊嚴、皇室の聖澤を感じ、大君の心を心として、一大家族として至誠を致し、自活獨行の市民となり、民德を樹て奉公に殉するは、愛國の本旨ならずや。

特權 憲法治下、市町村制下の市民は自己の特權を知らざるべからず。統治機關の行動は如何、統治の主體と容躰は如何、天皇の大權 臣民の憲法上義務權利、市町村公民の權利三務、市町村會の組織、撰擧法、其行政機關は如何、知らんと欲せば『市民』を讀め。

比較 列國に對する比較上の智識は國民敎育の急務也、比較上智識は外交を主なりとす。東洋對大日本、歐洲對大日本、明治時代世界對大日本の外交史を細叙し千年間の外交史を罵て他動的徒弟的寫眞的と評し將來を深警す、要するに『市民』は大日本市民の實を明にし、大にし、堅くせんとするに在り。

日章旗論は二十頁の長篇近時の新文字

通譯官 保野保和編纂

新撰臺灣語集

紙數百頁餘
定價六錢
郵税貳錢

臺灣は南極星の如くに輝きて幸運を求むる者を引く事恰かも英人が濠洲を發見したる當時の如くあらんとす、此の時に當て先づ第一に急要を告ぐるものは、其地の言語自脩是れなり。本書は比志島混成技隊附保野通譯官が實地に就き最も必要なる言語を精撰し、精細緻密に我言語と對照したる良書にして、苟も同島に志あるものは、是非とも坐右に備へざる可らざるもの也。

右臺灣語集都合の爲め發賣延引の處今般愈〻發賣す

再版 **臺灣** 一冊拾錢 郵税貳錢

臺灣地圖 一枚一錢五厘 郵税五枚迄貳錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 **民友社**

家庭叢書

定價各拾錢
郵稅各二錢

- 第一巻 家庭の和樂
- 第二巻 夏の家庭
- 第三巻 玩具と遊戯
- 第四巻 家庭教育
- 第五巻 小兒養育
- 第六巻 家庭衛生
- 第七巻 家政整理
- 第八巻 簡易料理
- 第九巻 社交一斑
- 第十巻 婦人と職業
- 號外 家庭理財

家庭叢書發刊以來大に世の好評を博し、毎冊版を重ぬる幾回、實に非常の勢力を以て愛讀諸君の意に投じ、已に其三四冊は高等小學校及其以上にある女子教育の學校に於て、其教科用書となすに至り、又家庭の良教育、家庭の新生活、家庭の新組織及家庭の和樂、健全、進歩、改革、矯風、經濟衛生等に志ある家庭にては、必らず一本を座右に備ふに至れり、以て家庭叢書が如何なる勢力を以て世の家庭の摸範となり、顧問となり、助言者となるかを知るに足るべし

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

六版 國民叢書	青年と教育	定價拾五錢 郵稅二錢
十一版 國民叢書	靜思餘錄	定價拾五錢 郵稅二錢
六版 國民叢書	文學斷片	定價拾五錢 郵稅四錢
四版 國民叢書	天然と人	定價二十錢 郵稅四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

婦人科小兒科專門

赤阪區丹後町一番地安藤邸角

女醫 大村のぶ子

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		郵稅地方共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)	前金五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)	同金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人 金子佐治郎
編輯人 塚越芳太郎
發行所 東京市京橋區日吉町四番地 家庭雜誌社

明治廿八年七月廿五日發行

家庭雜誌第五拾八號

目錄

社説

科學

文藝

史談

家政

雜錄

時事一斑



家庭雜誌第五拾八號
（明治廿八年七月廿五日發兌）

社說

兒童の敎訓としての說話



兒童は天然の學習者なり、彼等は何物をも見んと欲し、何事をも聞かんと欲す。而して其の見聞に就て、恒に學習せんとしつゝあり。

世上に兒童程、話說を好むものあらず。彼等は桃太郎カチ〱山より加藤清正、大江山鬼狩に到る迄、一として之を聞くを好まざるなし。而して一たび之を聞くや、彼等は恒に之を記臆し、之を想起し、之を復習して、其の好奇心を滿足せしむ。吾人竊かに思ふ、初等敎育の隨一は、話說にありと。

彼等の新知識を求むる熱心なる、餓者の食に於けるが如し。若し健全淸鮮なる食物に有り附く能はずんば、彼等は腐敗したる食物にても、之に饜くことを禁ずる能はず。彼等若し健全淸鮮なる知識を得る能はずんば、彼等は腐敗したる知識にても、之を得んことを努む。何となれば彼等は到底、彼物かを得ざれば、休せざれば也。

故に若し平正にして醇實なる、人の德性を養ひ、品格を高め、理想を崇ふする話說を聞かずんば、彼等は偏僻にして怪奇なる、若しくは不健全にして人間性情の中庸を失したる話說を聞かんことを求む。彼等の求むるや、自然の本能によりて然る也。水の下きに就くが如くに、炎の上に登るが如くに。

故に吾人は兒童話說の、決して等閑になす可らざるを見る。兒童に對しては、話說は話說にあらずして事實

也、手本也、活物也。彼等桃太郎の話を聞けば、自から桃太郎となり。加藤清正の話を聞けば、自から加藤清正となる。大江山の酒呑童子を話せば、その眼中に、大杯を傾けたる、濶面慢腹の鬼を見る。而して此の昔話こそ、一生を通じて動かす可らざる教訓とはなるなり。修身の運命を定む可き、指南針となる也。

されば吾人は、世の父母兄弟たる人に諗けざるを得ず。願くば其の一家の子女に話す話説をして、平正、醇實にして、人の德性を養ひ、品格を高め、理想を崇ふするの話説たらしめよ。一時の冗談視する勿れ、一時の遊戯視する勿れ、眞個に家庭教訓の基本は、此に在りと知らずや。

兒童に話す種子としては（第一）歷史的の話説を妙とす。歷史中には、數多の好題目あり。義經、ワシントンの類多からずとせず。（第二）世話にして、桃太郎、カチ〱山の類、尤も淡泊にして、却て趣味多し。（第三）俚諺にして、伊蘇普物語の類は、絶大の眞理と教訓とを、片言の中に寓するを見る。

若しそれ怪談、俗説、漫に兒童の感情を刺戟するものは、尤も之を避けざる可らず。

兒童の一生を通じて、精神的病者となすが如きは、此の無心なる昔話の刺戟によるもの尠しとせず。吾人は自個少年時代の經驗によりて、特に此の話説の大切なるを感ず。

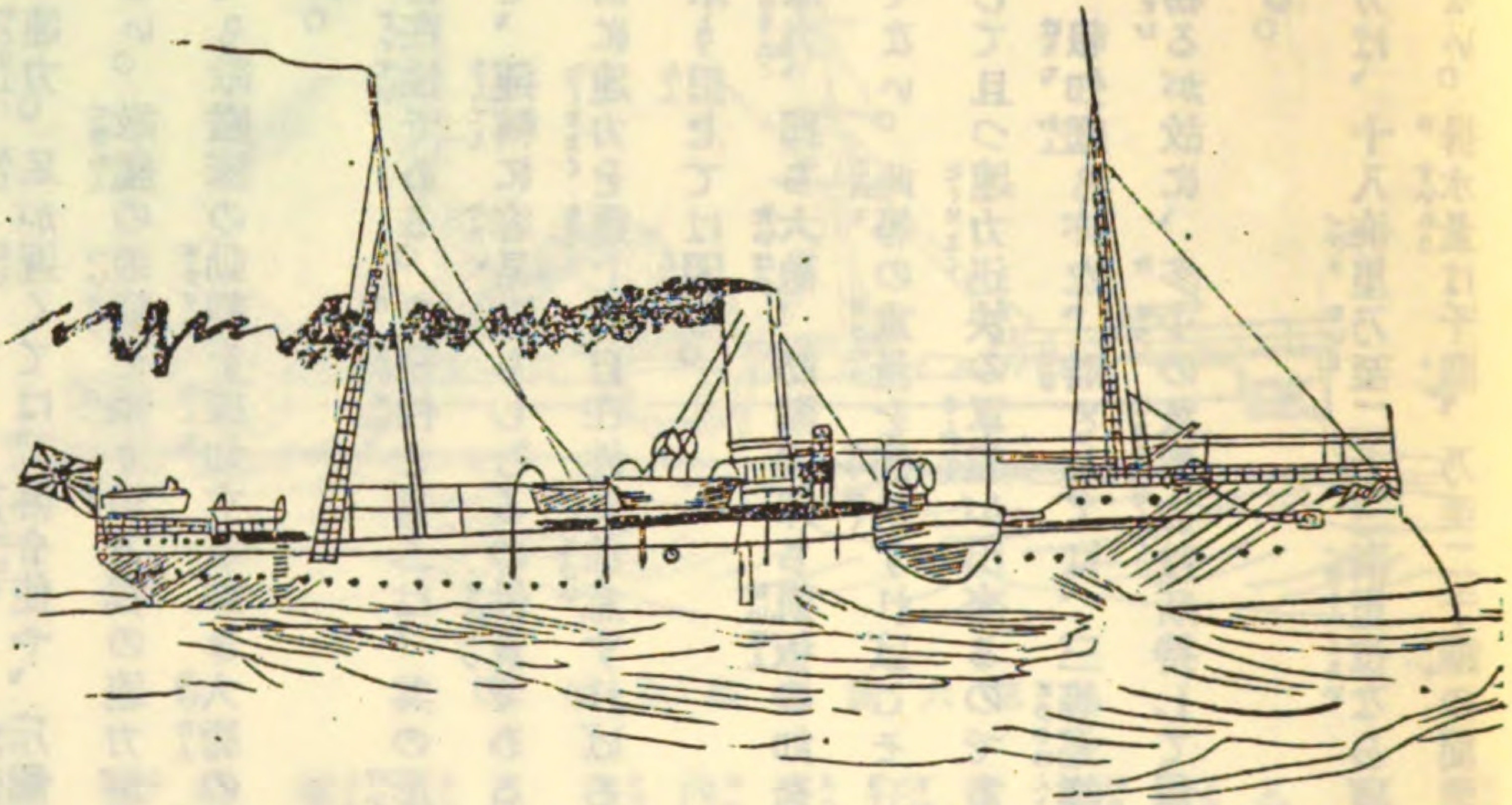
科學

軍艦の種類（續き）

國木田哲夫

第四は報知艦である。

報知艦の役は何であるか。其の重なる目的は先づ次の如くである。



第五圖　報知艦（八重山艦）

第一、敵艦隊の動靜を窺ひ、之れを我艦隊に報知する事、乃ち斥候騎兵の如きものである。

第二、我が軍艦と軍艦との間、或は軍艦と軍港との間、或は根據地と軍艦との間に在りて、傳令の職を取るとである。乃ち傳令使の役を務めるのである。

偖て報知艦の此の二ッの任務を、更らに實地にあてはめて言へば、

即ち敵國の沿岸に侵入して、其の近傍に於ける防禦策、其他の方策を窺ふて、急馳之れを我が艦隊に報ずるが如き。又た自國の沿海に出沒して專ら來襲する敵艦の動靜を探知し、自國艦隊の注意を促すが如き。又た艦隊司令官或は鎮守府司令長官の命令を所轄軍艦に傳達するが如き。

實に機敏を要する任務に當る者は此の報知艦であるのだ。

以て其構造上の特質は推測する事が出來るであらう。

第一に、速力。足が遲くては、傳令使や、斥候騎兵は務まらない。敵艦の追窮を乘り切る程の速力がなくては、とても敵艦隊の動靜を探知する如き大膽の任事は出來ない。

次ぎに自在性である。自在性と言ふは、其の形躰を輕小にして、運轉に容易ならしむるの性質である。されど、如何に速力を重じ、自在性に注意すればとて、凌波性を余り損じては困る。

從て攻擊力、即ち大砲、防禦力即ち凱板の如きは、余り必要でない。此等の重量を節約すればこそ、始めて輕小にして且つ速力迅快の軍艦が出來るのである。

されど、報知艦も亦た、時としては、三等巡洋艦位の代理を務るが故に、多少の攻擊力は所持して居るが通例である。

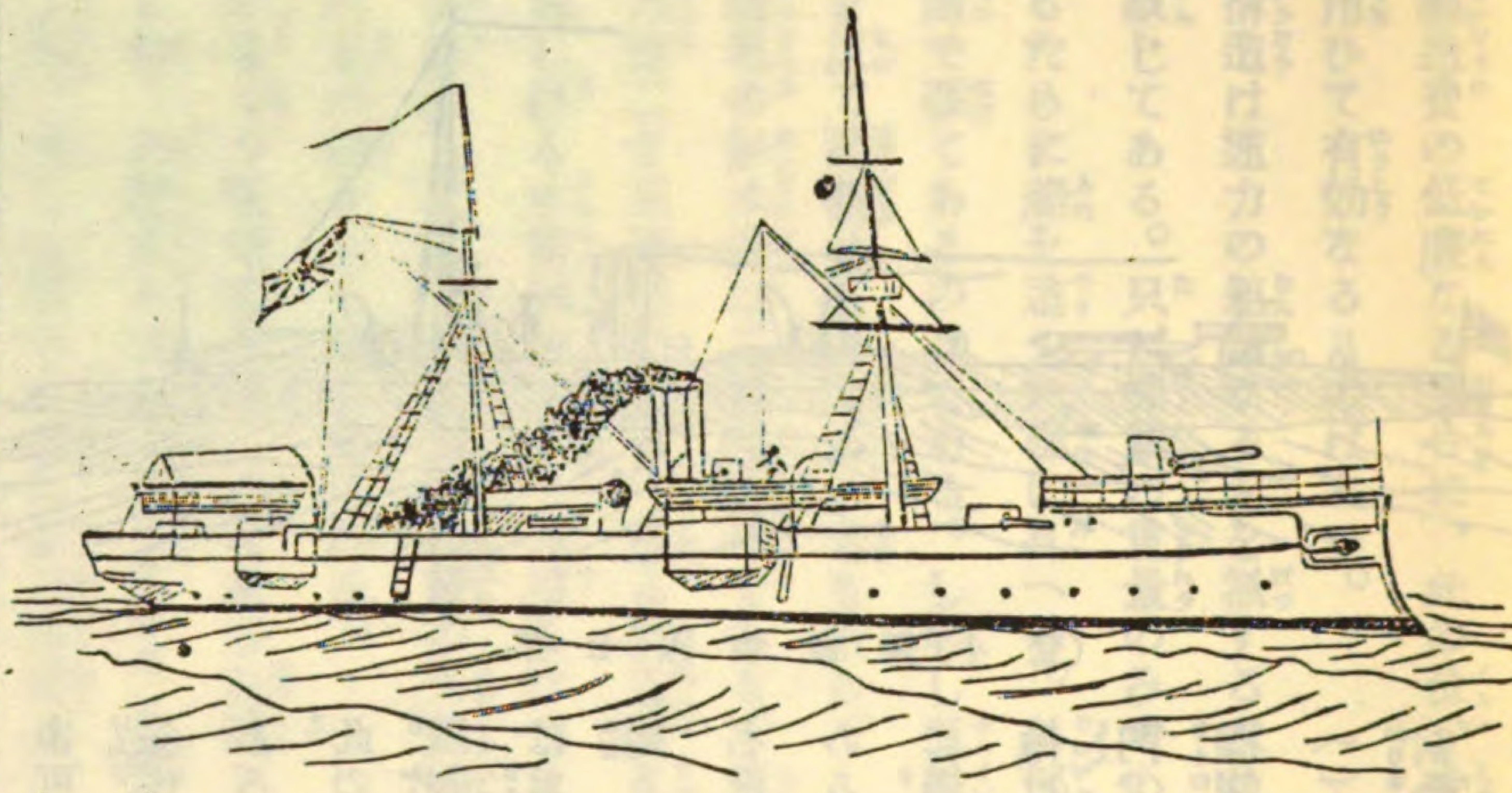
先づ速力は、十八海里乃至二十三海里位ならば左まで不足はない。排水量は千噸、乃至二千噸の間である。

此圖に示す八重山艦は、報知艦として製造せられたものである。されど三等巡洋艦としても使用し得るのである。排水量は千六百噸、速力は二十海里の設計である。十二珊砲一門、機關砲六門を有して居る。たゞし凌波性は欠げて居る樣だが、形躰上、已むを得ないのであらう。

第五は砲艦。乃ち英語のガン、ベッセルといふ種類であるが、實に其の名稱の通りである。只だ大砲を載せる計りに船を造つたのである。船が主でない。大砲が主である。

戰時は前に話した海岸使役艦の一種として彼れと等しき任務を盡すのである。平時に於ては先づ海上の警察官と稱して可なりだ。

然るに砲艦が海岸使役艦と異なる點を言へば、其の形躰が極めて輕小であつて、吃水の如きも別段に淺くし、海岸使役艦すら侵入し得ざる場處に乘込む事が出來る



第六圖　砲艦（赤城艦）

程である事である。敵國を攻擊するに當て、自在に其の淺瀨或は內海に來往し、或は河上に遡りて進擊し、敵の砲臺間近かく攻寄する

が如き、又た自國を守る場合より言へば、島嶼の間をも自由に出沒し、利あれば進で大海に出ざるも便、利なければ退いて彼れの尾行し得ざる淺水に引上ぐるも便、以て輕快なる運動を戰時に施すを得るは實に此の砲艦であるのである。

偖て然らば其の構造は如何であるか。

第一、吃水淺き事、

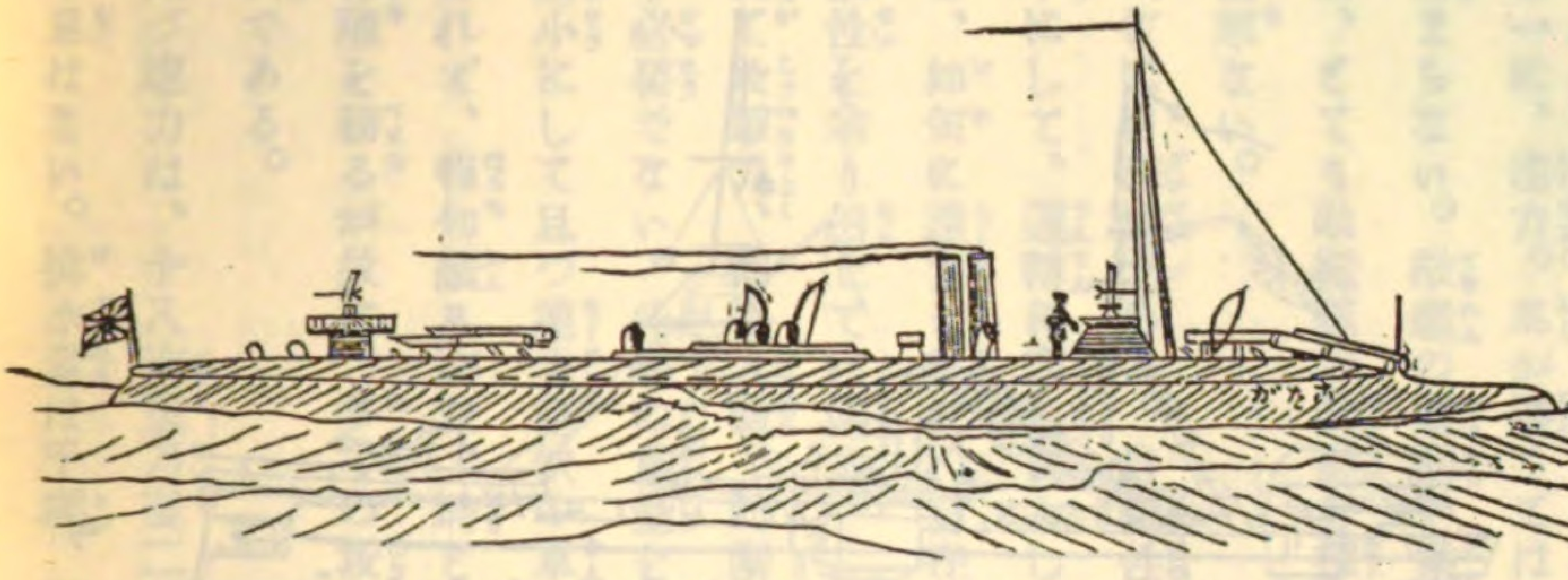
第二、形躰小なる事、

第三、防禦力等を節約して、飽くまで攻擊力を強くする事、

第四、多數の大砲よりは寧ろ小數にして巨大有力の大砲に攻擊力を集注する事。

第五、攻擊力に亞ぎ、速力、凌波性、遠航性。

先づ方今、普通に砲艦と稱せらるゝものは、五百噸以上、千噸位の排水量を有し、二十一珊內外の大砲を裝置し、十三海里內外の速力、千百海里餘の遠航性に堪



第七圖　水雷艇（小鷹）

ゆ可き石炭量等を兼備し居るものである。

此の圖に示すは赤城艦である。これは君も知つて居る通り、黄海の役大名を擧げた砲艦である。六百十五噸、砲は二十四珊を一門、十二珊を一門、機關砲を二門を備へて居て、小さい割合に砲力は懼るべきものであるのだ。

砲艦の話は先づこんな者として、

第六に、水雷艇及び水雷捕獲艦。

一寸と一言するが、水雷艇と水雷捕獲艦とは別種の者である。たゞ説明の便宜上、之れを第六種として一束にしたのであるから其積りで居給へ。

水雷艇の事は、威海衛の役で定遠號以下破壞の大名譽このかた、君も殆んど其の性質など已に聞て居るだろうから、先づ大略を話す事にする。

水雷艇本來の任務は、砲艦と同じく、海岸使役艦を補佐するのである。但し目指す敵は專ら軍艦である。武器は專ら水雷を用ひ、形躰は極めて輕小であつて、速力は極めて迅快なるを貴ぶ、先づ此等が砲艦と餘程異なる處である。其の海上に浮びたる樣は、鯨の背を現はす如くであるが、其の形は寧ろ鰹に似て、一見輕快、水をきつて飛ぶが如く走る樣を想像する事が出來る。

此圖に示すは我水雷艇最大の『小鷹』である。製造費の低廉なる割合に、此の位、攻撃と防禦と並び用ひて有効なるものはない。

構造は速力の迅快なるとを欲するために有ゆる重量が減じてある。只だ機關の重量のみである。機關を載するために船を造つた樣に見へる。外部は極めて薄き鋼鐵で張てあるのみである。しかし三吋計りの鋼鐵甲板を以て防禦せられてある者もあるで

通常の排水量は二百噸内外である。速力は、十八海里乃至二十五海里である。然るに近時己に三十海里を疾走し得る水雷艇が西洋では造られたそうだ。

如何にして水雷艇は敵艦攻撃の大快事を演ずるか、これ君が聽きたく思ふ處である。

敵味方の艦隊數十艘、互に其の砲門を開いて火蓋を切る時、砲煙濛々、日光もために暗き程に至るべし。

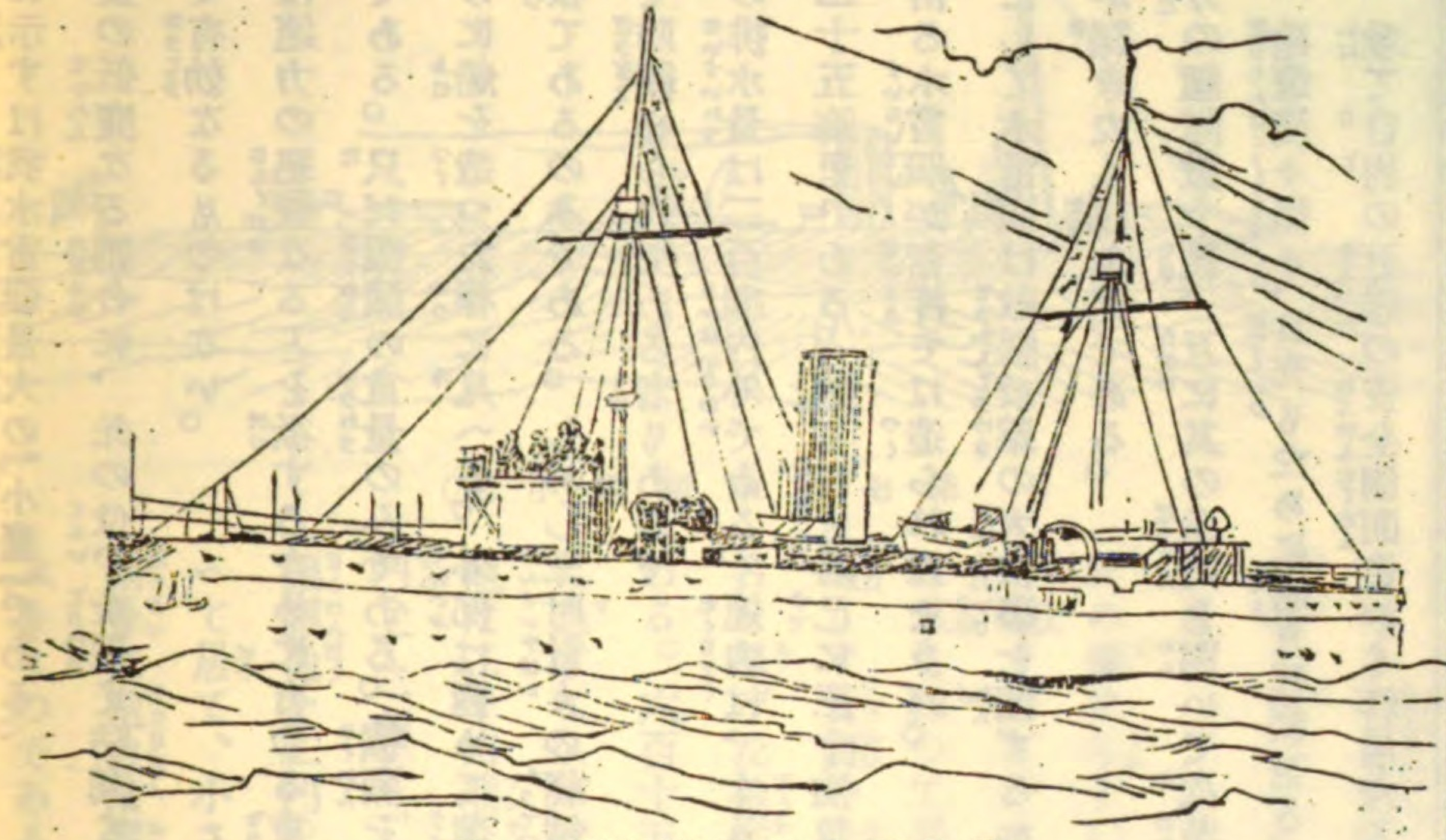
此時、兼て自固の巨艦の安全側面にかくれ居たる水雷艇、煙に忍び、煙をくゞり、疾風の如く波を切て敵艦に近づく事凡そ五百ヤード、打出す魚形水雷甘く當れば一萬何千噸の戰鬪艦も、哀れ一撃のもとに沈没するのだ。

夜間、暗きに乘じて敵の軍港に侵入するの攻撃方は現に威海衛で吾が水雷艇の實行して大成功したる如くである、其他、暗夜に乘じて敵艦隊の航行するを探知し、突如として闇より現はれ、不意に彼れを襲撃するが如き尤も妙である。

しかし、流石は形躰の小にして徒らに細長なるが故に、凌波性を欠ぐは實に惜しひ事である。澎湖島沖で吾が水雷艇十六號が沈没したのは、此の爲めであつた。

兎に角此の懼る可き水雷艇の攻撃には、如何なる戰鬪艦でも避易せざるを得ない。茲に於て水雷捕獲艦の必要か生じてきた。

水雷捕獲艦は敵の水雷艇を驅逐し、捕獲し、撃沈する



第八圖水雷捕獲艦（龍田艦）

が其の大目的である。されど又た味方の水雷艇隊を誘導指揮することもある。又た水雷發射管を十分備へ居るから、大なる水雷艇として、運動する場合もあるだろう。

故に、構造は

第一、水雷艇に追窮するに足る程の速力、

第二、水雷艇を破壊するに足る程の攻擊力。

第三、時機に由り水雷艇を突き破るの目的にて撞首を要す。

第四、相應なる凌波性、遠航性、

攻擊力は速射砲、機關砲に限る。それでないと迅速なる水雷艇を攻擊するに間に合はない。

排水量は先づ四五百噸以上、千噸位である。吾國『龍田』艦の如き、實に此種である。

第七、練習艦、これは實地教育に用ざるもので、老艦を用ひ、帆走を重に務むるのである。『比叡』、『金剛』、

『淺間』、『迅鯨』の如き、皆な吾國の練習艦である。攻撃力もいらない、防禦力も不用。たゞ教授に必要の器具が備足すれば十分だ。

さて、以上の話しで、大概の種別は君も了解したであらう。

水夫は徐ろに躰を起し乍ら叫びぬ。

男に須らく水雷艇に乗るべしだ。日本武士には水雷艇が尤も得意の武器であるのだ。

（完）

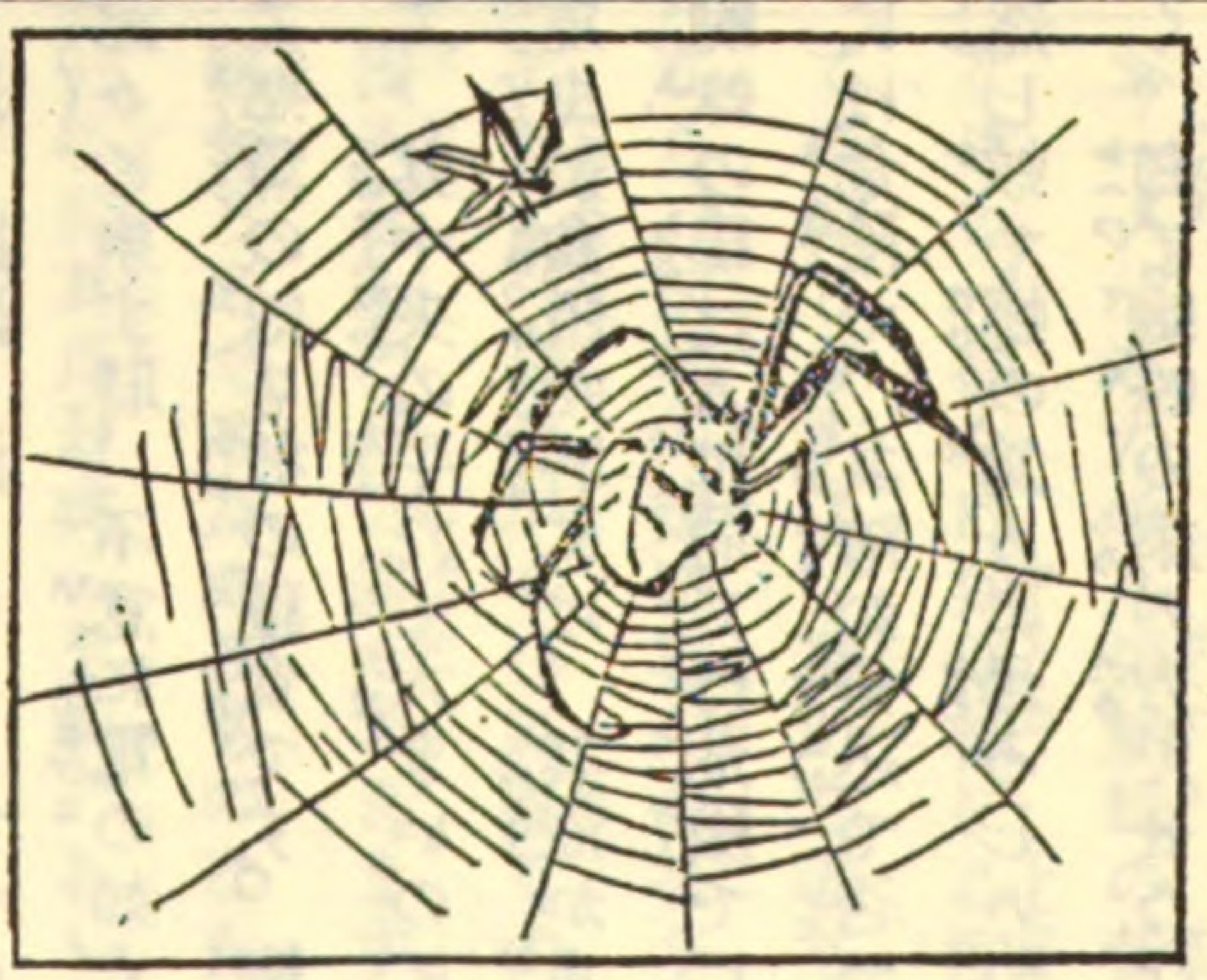
文藝

小兒の世界

嵯峨のや主人

蜘蛛

蜘蛛といふ虫は、一寸見た所がきたならしいものですから、兎角人からは好れません姿の毒々しい所から、氣の弱い小兒なぞは怖がりさへします。ですけれど善惡は形状では分りません、御覧なさい、蛇の様な毒虫でさへ姿は奇麗ですもの蜘蛛は人間に害をなさない計ではなく、却て益を爲すのです。私達を意地ゆる蠅や蚊の様な虫けらを退治てくれますもの、一寸まあ御覧なさい、彼の躰の作り方を、如何様に惡黨退治に生れついて居るでせう。頭と胸とは同じ部分にあるが、丸い玉の様なお腹の方は、胸と僅に續て居て、其大きい事と言ては、



他の部分より二倍も有ますよ。彼は此お腹へ食物を溜て置て、蠅や蚊が木の虚や、戸の隙間なぞへ隠て居て、

出て來ない不獵の日は、其で凌を附て居るのです、蜘蛛は一週間や二週間は、何も食はずに居ても平氣です、一月位は大丈夫です、其代り天氣の好日は彼の爲めの豐年で、一度にしこたま食ますこと

其に蜘蛛は勿々怜悧者ですよ、とんと物馴た獵人歟何歟の樣に、種々の塲所を見立て獲物を獵出しますがね、其塲所次第で彼等の衣服は違て居ますよ、林に居る蜘蛛は其色靑く、野や家の隅々に居る蜘蛛は、其色稍黑いか或は鼠色です。又蜘蛛の眼は八ッ有て勿々鋭く、足は八本あつて、長く其走ることの速かですこと。

其に蜘蛛の獵るする方法はいろ〳〵ですよ、先づ蚊の一群が、庭の植込を飛出して、窓からぶんと寢室へ飛入り、すや〳〵と眠て居る小兒の額なぞへとまり、さも甘さうに淸き血を吸ひ、腹充溢になつたので心から嬉しく、ぶる〳〵と身をふるはして眞赤になり、膨れてぶんと飛上り、明方の天に夜半の手柄を誇り貌、凱歌を唱へて古巣へ歸り、さも快さゝうに木葉にとまりて、溫き夢を見て居る所なぞへ、窃用心して近寄、眼を以て距離を測りつゝ、何音のせぬ樣に進み寄りて、愈々と申す時、不意に電の如く飛びつきます、此に於て悪黨の蚊も彼の獲食です。蜘蛛は二ッの腮を持て居て、其中央の平たく大きいのには毒液が有、而して一度虫に食附た時には、其液が虫の身に染み込のです。蜘蛛の腮は人に向ては危險ではないが、蚊や蠅の爲めには危險で、其液が染込むや否や、直に死で仕舞ます。然し蚊や蠅の爲めに恐ろしいのは、此種の方法ではなく、却て蜘蛛の網の方でせうよ、皆樣が御存の通り、蚊や蠅の樣な羽虫は、群を爲して飛ぶのを好きますが、蜘蛛は怜悧ですがら、其澤山出さうな所を見量つて、上手に網を張るのです。ですけれど如何して蜘蛛は、彼樣に網を張るのでせう？ 其は蜘蛛のお腹の中には、糊の樣なねばき汁が有て、其を蜘蛛が腹にある澤山の

穴から一度に糸の樣に咄出すのです。此汁は一度空氣に觸るや否固まつて、而して彼細き糸の網が、小さな虫を捕へる樣になるのです蜘蛛は又此細き糸を傳はつて、巧みに天井から床に降りたり、梢から地に降たり、又床から天井に上つたり、地から梢に上つたり、自由自在に上下しますが、其素早い事と言つたら、實に水兵が檣を登るより早いのですよ、然し如何して斯彼が素早く働き得る歟といふのを知るには、彼の足の作り方を知らなければなりません、蜘蛛は八本の足を持て居ますがね、其足には何れも三つの脚掌が有のですよ、而して二ツは大きく、一ツは小さく、然も其脚掌には齒の樣な鍵の樣なものが澤山附着て居ます、既に足が八本で、一本の足に脚掌が三宛在るのですから、都合總て、脚掌は二十四有る理屈でせう、其ですもの一ツ位折れる事が有ても平氣です、二十三の脚掌は充分彼の身を支へるに足りるのです。

蜘蛛の牝は卵を背負て歩て居ますがね、其卵からは小蜘蛛が生れるのです、母蜘蛛は大層小蜘蛛を可愛がるもので、命にかへても之を護ります、母蜘蛛は卵を自分の吐出した太き和らかな網で包んで、小な玉の樣な形になし、其を其身に附着て置ます。若しも貴君方のお一人どなたでも母蜘蛛の背負て居る卵袋を取て御覽なさい、彼女は如何樣に心配するでせう、大變に周章てさがしますよ、其から若も其を見附でもしやうものなら、又如何樣に喜ぶでせう。母蜘蛛の中には地を掘て其卵袋をかくして置くのも有ます、而して此穴の出入を土の戶で塞でおきますがね、若も敵有て此戶を明やうとでも爲やうものなら、彼女は自分の背を以て一心に其戶を支へます、あゝ如何に見憎い形狀の蜘蛛にやさしい母心が有ませう。

蜘蛛の種類は大層澤山有て、殆んど數へられぬ程です、近世博物學者は彼を虫の種類に算入せず、別に關接動

物といふ一種の階級を作ッて其中に組入て置きます。此無數の蜘蛛は、其種類に因て、或は晝、或は夜、或は夕暮野に、里に、森に、叢に、家に、到る所に於て百萬の毒虫を退治します。諸君は蜘蛛の網を御存でせう、秋の朝萩の下葉の色づく頃杉の生垣なぞに絹糸の如く奇麗にかゝッて居るのを、野分の朝なぞ、風に網の破られたまゝかゝれるなども誠に哀れなもので有ます。

駱駝を入るゝなかれ

亞布利加や亞刺比亞の砂漠では、晝間は非常の熱さですが、夜になると中々寒いと申します。

偖或時の事、扇にかいた日の丸の樣な紅い太陽が渺々とした砂漠の端に沈んで、薄灰色の夕空に宵の明星の天使の眼の樣にきらつく頃、一人の旅人がひらりと駱駝の背から下りて砂の上に棹を立て、夫れから天幕を張り、毛布を敷き、火を焚いて夕飯を拵へ、十分食べて、駱駝を天幕の外に繋いで、自分は天幕の中にごろりと横になり、直ぐに夢になりました。

次第に夜はふけます。お月樣が研きすました鏡の樣に、中空に澄み渡つて、其光は霜の樣に砂の上に落ち、空氣は次第に冷へて、露は氷の玉の樣に砂漠に置きました。先刻から天幕の外で、膝を折敷いて、ウト／＼しかけた駱駝は、あまりの寒さにガタ／＼身震ひして起き上り、天幕の隙間から覗き込んで、

モシ／＼旦那樣（一寸御斷り致しますが、皆樣は駱駝なんだ動物が言ふものかと思ひなさゐますでせうが、夫れは間違で、動物ももの言ひます、たゞ人間の耳に聞かれないばかりですよ）

天幕の內に眠つて居た旅人は、此聲にビックリして起き上り、天幕の外へ出て見ても、眼に入るものは唯一輪の月の光のみで、何も居りません。偖は夢であつた

と思つて、またウト〳〵眠りかけますと、また

モシ〳〵旦那樣、旦那樣、此處ですよ、私ですよ、

と言ふ聲が聞へました。旅人は初めて氣がつき、

何だ、貴樣か此眞夜中に何の用だい。

駱駝はブル〳〵ガタ〳〵震へながら

旦那樣、後生でムりますから、ドウぞ私の鼻の先丈天幕の内に入れさして下さいませんか、寒くて鼻の先が切れそうでムいます。

旅人は鼻の先位なら邪魔になるまいと思つて、許しました。頓てウト〳〵眠りかけますと、又々

モシ旦那樣、後生でムりますから、ドウぞ私の頸丈天幕の内に入れさして下さいませんか、寒くてモウ頸がきれソウでムります。

と駱駝が歎願致しますので、頸丈なら邪魔にもなるまいとゆるして遣りますと、程なく

モシ〳〵旦那樣、後生でムいますから、ドウぞ私の前足二本たッた二本丈天幕の内へ入れさして下さいませんか、寒くてモウ前足がきれそうでムひます。

旅人は前足二本なら許してよからふと、少し窮屈なのを勘忍して天幕へ入れてやりますと、頓て駱駝奴はツカ〳〵と天幕の内へ押し入り、前足どころか其大きな躰が皆這入つて仕舞つて、天幕は一ぱいになつたので主人の旅人は天幕の外へ押出され、ガタ〳〵震ひながら

コレ〳〵駱公、貴樣は乃公を押出してどうするのだ。エー寒ひ、早く入れて呉れんか。

駱駝はセヽラ笑ひながら、

ヘン、入れて呉れもないものだ。入つたからは己の有だ。へヽヽヽ、寒ひか〳〵。寒ひ程なら、なぜ初め己を入れるのだ。

旅人は歯ぎしりをして悔んでも仕方がなく、終砂漠の寒さに凍へ死ましたとサ。

偖皆樣、此は亞刺比亞あたりで、專ら行はるゝ話ですが、此には大切な敎訓が含んでは居ますまいか。
人の心は天幕で、旅人は善、駱駝は惡と譬へてもよろしひではありませんか。人の心は元來善くある可き筈のものですが、兎角駱駝が鼻先を入れたがつたり、頸先を入れたがつたり、前足を入れたがつたりして、はては人の心は惡に占領せられる樣になり易いものです。夫につけて、大事なのは、駱駝の鼻の先を入れさせぬ事であります。皆樣がお母さんの御言に背ひて學校に行くのをよして橫町の芳ちやんと一日遊んで居たかつたり、お向ふの花ちやんの簪が欲くなつたり、ウソをついて見たくなつたり、兄弟喧嘩をしたくなつたりする時は、それこそ駱駝奴が皆樣の天幕に鼻の先を入れやうとする時で、ドウゾ其樣時には『ホンニソラ此間の「家庭雜誌」にも「駱駝を入るゝなかれ」と書ひてあつた』と思ひ出して、強ひ強ひ日本兵が支那人を破つた樣に、駱駝奴を退けて下さい。

比喩談

湘川漁夫

温室の花

上には日光を吸ひ入るゝが、ため硝子板を張り、下には室內を煖むるがため、爐の設ある、王侯貴人の住居ともいふべき家の中に、別天地の春を占め、冬の嚴寒をば、身に覺え得たるとなき、多數の花色香を競べ各其品格を誇り、高き理想を抱きて世間に出で、現すべき、伎倆の事など語り合ひけり。
「世には極めて俗物多し、我等の力に依らざれば、世は實力世界と成り果てゝ、優美の念は皆失せ去らん」
「又其上に神の榮を顯する[illegible]道の任を身に擔ふ、我等の責[illegible]

「左なり誠に其の如し、其大任を帯びながら、世を慰むるは亦我等の務、世は快樂を與へずば、愈困苦に陷るべし。幾多の家族は望を抱き、我等の出づるを待ち居るならん」

「さらば此處にて育てられたる甲斐もあり、斯く粧ひたる飾をもて、共々早く出で行きて、都も村も一樣に、錦染め成す世となさん」

「老いたる木々は如何せし、力は衰へ果てたるか、緑の葉をも出し得ず、物淋しくもあるとよ、世は我等を要するなり」

口々に己が思を述べ居りし時、俄かに外は騷がしく、颯と音して吹く風勁く、霰は屋根にたばしりければ、皆注意の耳を欹て「これは世間の嵐なり、我等も敎を受けたる如く、何れ艱苦に遭ふとならん、されど其は何程の事やあるべき、我等の若氣の勢は、見事に之に打ち勝ち得ん」とて倘益々勇み立ちけり。

其後程なく、此内數種の花[illegible]れ、飛び立つ計りに喜び、[illegible]を見せしめんと、頻りに[illegible]天倘寒く、雪さへ降り來り[illegible]たれど、はや次第に弱り行き、主[illegible]て勞りくれしも其効なく、最初の[illegible]萎れかゝり「味氣なき憂世かな、か[illegible]とは、誰れか能く我等の心を悟り得べき[illegible]張り詰めて、山々は嚴しく縛られ、川々は口[illegible]れ、冷かなると限りなく、温かなる感情は何處を見[illegible]もあるとなし。この優しき我等をも、受け入るゝ力なくば、如何なる者の來るとて、改革の勞は無益のみ。我等の技倆は施すべき餘地なく、空しく大望を抱いて、果つるとの口惜しさよ」と、呟き罵り居れるをきゝてヒユーヒユーと鳴り亘る風を物ともせず、枝を廣げて眞直に立ち居れる大木、窓の外より覗き込み、「若き方

偖皆樣、此は亞刺比亞あたりで、專ら行はるゝ話ですが、此には大切な教訓が含んでは居ますまいか。

人の心は天幕で、旅人は善、駱駝は惡と譬へてもよろしいではありませんか。人の心は元來善くある可き筈のものですが、兎角駱駝が鼻先を入れたがつたり、頸先を入れたがつたり、前足を入れたがつたりして、はては人の心は惡に占領せられる樣になり易いものです。夫につけて、大事なのは、駱駝の鼻の先を入れさせぬ事であります。皆樣がお母さんの御言に背ひて學校に行くのをよして横町の芳ちやんと一日遊んで居たかッたり、お向ふの花ちやんの簪が欲くなつたり、ウソをついて見たくなつたり、兄弟喧嘩をしたくなつたりする時は、それこそ駱駝奴が皆樣の天幕に鼻の先を入れやうとする時で、ドゥゾ其樣時には『ホンニソラ此間の「家庭雜誌」にも「駱駝を入るゝなかれ」と書ひてあつた』と思ひ出して、强ひ强ひ日本兵が支那人を破つた樣に、駱駝奴を退けて下さい。

比喩談

湘川漁夫

温室の花

上には日光を吸ひ入るゝが、ため硝子板を張り、下には室内を煖むるがため、爐の設ある、王侯貴人の住居ともいふべき家の中に、別天地の春を占め、冬の最中の嚴寒をば、身に覺え得たるとなき、多數の花互に其色香を競べ各々其品格を誇り、高き理想を抱きつゝ頓て世間に出で、現すべき、伎倆の事など語り合ひ居りけり。

「世には極めて俗物多し、我等の力に依らざれば、世は實力世界と成り果てゝ、優美の念は消え失せ去らん」

「又其上に神の榮を顯する、我等に勝れる者やある、傳道の任を身に擔ふ、我等の責は重いかな」

「左なり誠に其の如し、其大任を帶びながら、世を慰むるは亦我等の務、世は快樂を與へずば、愈困苦に陷るべし。幾多の家族は望を抱き、我等の出づるを待ち居るならん」

「さらば此處にて育てられたる甲斐もあり、斯く粧ひたる飾をもて、共々早く出で行きて、都も村も一樣に、錦染め成す世となさん」

「老いたる木々は如何せし、力は衰へ果てたるか、綠の葉をも出し得ず、物淋しくもあるとよ、世は我等を要するなり」

口々に己が思を述べ居りし時、俄かに外は騷がしく、颯と音して吹く風勁く、霰は屋根にたばしりければ、皆注意の耳を欹て「これは世間の嵐なり、我等も敎を受けたる如く、何れ艱苦に遭ふとならん、されど其は何程の事やあるべき、我等の若氣の勢は、見事に之に打ち勝ち得ん」とて倘益々勇み立ちけり。

其後程なく、此内數種の花は、人に購はれて連れ行かれ、飛び立つ計りに喜び、紅白の色を粧ひて、己が姿を見せしめんと、頻りに心を配りけれど、如何にせん天倘寒く、雪さへ降り來りければ、一日二日は耐え得たれど、はや次第に弱り行き、主人は室内に持ち運びて勞りくれしも其效なく、最初の元氣は消え失せて、萎れかゝり「味氣なき憂世かな、かくまで思想の低きとは、誰れか能く我等の心を悟り得べき。氷は大地に張り詰めて、山々は嚴しく縛られ、川々は口を閉ざゝれ、冷かなると限りなく、温かなる感情は何處を見るもあるとなし。この優しき我等をも、受け入るゝ力なくば、如何なる者の來るとて、改革の勞は無益のみ。我等の技倆は施すべき餘地なく、空しく大望を抱いて、果つるとの口惜しさよ」と、呟き罵り居れるをきゝてヒユーヒユーと鳴り亘る風を物ともせず、枝を廣げて眞直に立ち居れる大木、窓の外より覗き込み、「若き方

々、世は空想にては渡り得じ、先づ雨風に暴されて、長き月日を過ごし行き、根を張るとを努むべし、徒らに花を急げば、皆虚飾となるのみなり」と、親切に諭しきかせけり。

艱難を經て始めて人生を知る

鯰 と 泥 沼

鯰已が哲學の深きを誇り、髭を拈り、大口を開きて、山川に住居る魚等の心の見透し得べき程淺薄なるを、嘲り笑ふと常なりけるが、或る時一人の子供、衣の裾を捲り上げ、笊を携へて近寄り來りければ、鯰は冷笑ひ、是れも亦あさはかなる料簡かな、容易く此身を捉へ得んとは、いで人々の探り能はざる智識の程を見せくれん」とて、尾を振り鰭を動かして、泥水を掻き濁し、沼の底に潜り入りて、「深し深し」と、愈誇り居りけるに、誠、沼の深さは膝にまでも達せざりしかば、子供は能く能く其の隱れたる穴を見濟し、只一掬に掬ひ上げ、髭をとらへて驚く顔をば眺めやり、遂に柳の枝に串して持ち歸りけり。

濁れるを以て深しと思ふと勿れ

兄 弟 の 訴 訟

二人の兄弟其父親の死後、遺言状の文面に、明かならざる所あるより、財産の分配につき、激しき爭論起り、法庭に訴へて屡辯ずれども、双方に理ありて容易に捗取らず、一時は弟の勝に歸せんとし、弟は最早其財産を己が物の如く思ひ做し、種物を播き、工場を作り、水車を設くる等の計畫を爲し、年々收入の豫算等に忙はしかりけるに、兄は新たに法律に巧なる辯護師を雇ひ入れ、忽ち勝訴となりければ、弟は目的大に外れ、遺憾遣る方なかりしが、施すべき術も盡き果て、遂にいへる樣兄と爭ふとは去りにし親の心に非ず、況して兄は我が唯一人の親族なるを斯ばかりの財産を得たるがため、血を分けたる兄と不和を醸すは、後々迄の策

にあらず、又其上に、彼財産は思ひしよりも價値なく
收支償ふ見込少し」と。

人は利益を先にして德義を後にす(以上三種自作)

犀と駱駝

或る日、犀駱駝に逢ひて「我友よ、何故に我と君とは生活の度に斯く大なる懸隔ありて、我等の長なる人は、君には常に好き位置を與ふるか、告げ聽かせよ。彼は君に家と食物と手當とを與へ、時には己が麵包をも分ち、君を重んずると深く、君の種族を保護して、其の蕃殖を圖るを常とす。君に善き性質あるは我も知り。君は從順しく、眞面目に怠らず、其背に能く人の荷物、又は其妻子を荷なふ。されど其は我にも爲し得る所なれば、君にのみ屬する德とはいひがたし。我には取るべき所なきか。我は君と共に人の尊敬を受くべき價値ありと思ふ。其戰爭を助くるため、角と楯とを彼に與ふ。されども彼は我を惡みて逐ひ廻し、我を賤しめて、其前に出さしめず、是はそも何事ぞ」と訴へければ、駱駝は答へて「我友よ、我身の上を羨むなかれ。働は却て效なきものなり。人の心を得んとせば、其機嫌を取るを最上の務とせよ。彼が我種族を愛するは大に理由あり。君よ世渡の秘事を悟れ、我等は膝を屈むるとを知れるなり」と語りけり。

阿諛は世の人の最上の智惠なり

註、駱駝は能く前足を屈むることを得

蝸牛の自負

五月雨降りしきり、川々は水量增し、庭の面にも波立ちし頃、木の枝にありける蝸牛、始の程は愼深く、大切に家を守り、身の安全を喜び居りけるが、或る時、霖雨晴れて、日の光麗はしく、蟬は音樂を奏し、葵は錦を染め出し、萬の物すべて心地よげに見えければ、潜かに首を出してながめまはし、邊に人の居らぬを確

め、「是は面白や、家にのみ潜み居るとの愚かさよ、廣く世間に出で、其樂を味はん」とて、徐々と木より下り、垣を傳ひ、椽に沿ひて、彼方此方と歩み移り、はや落着きたる心も失せて、我儘次第に强り、些細の事に、擇嫌をなして、己が好む處に、大切なる家を引き廻り、果は愈增長して角など延ばし、誇り居りける時、忽ちいたづら子供の目に留り、「角出せ、角出せ」など、いぢりまはされ、竟には石にて打ち潰され、思ひ設けざる憐なる最期を遂げにけり。

　世に出でんとする者家を忽にすると勿れ

鮎と鱸

石に觸れ岩に當り、激流奔湍を物ともせず、何處までもと、一直線に進み上りたる、血氣盛んの鮎、如何がしたるか、途中にて其勇氣撓みて、下り來る樣子に見えければ、其後より隨ひ行きたる鱸、訝し氣に「君は何とて水源まで行かずして、途中にて其大望を思ひ止りたるか」と問ひけるに、鮎は物思はしげに、其腹を指し「其は言ふまでの事にてもなし、我は今數多の子を有ちたるが故なり」と答へければ、鱸も尤と同じて、深く感情を動かしけり。

　子を有てる者は責任の重きを知る

（以上二種自作）

農夫と老木

凡べて年古りたる者の運命は皆同じく、爰に世の益をも爲すと能はずして、園の隅に空しく立ち居れる老木ありけり。此木は梨の木にて最早昔の如く美はしき菓をも結ぶともなければ、農夫は切り倒さんとて、斧を振り揚げければ、老木は只管命を乞ひて「昔我が爲したる善事、我が與へたる菓物、我が得たる名譽に對し、又舊くよりの親に免じ、老後の年もはや僅かなれば、さまでつれなく取り扱はずと、今暫く許し置き給へ」と託言しけれど、無慈悲の恩知らずは、首を背け「我

は誠に汝を倒すに忍びざれど、今薪の入用あれど、森に行くこと能はざれば已むを得ざるなり」とてきかざりき。

鶯も出で來りて、美はしき聲にて憐を乞ひて、其無情を訴へ、農夫は是れがため、其妻の、木の下に坐り、仕事の最中、鶯の聲に心を取られて、樂み居りたる、昔の事など憶ひ出しゝが、またも心を勵まし、いらつて一擊々込みしに、忽ちブンブンと喧しき一群の蜂、現れ出で「此老耄め、なにをなす、自ら傷げて己が利益を損ふを知らざるか、我等が住家を打ち壞さば、此老木よりも價ある、貴き密を與へまじ、舊時の記憶も、尙情を動かす力なくば、此理のみは定めて心に入るならん」と責め諭しければ、農夫は始めて心付き「左なり昔は樂しくありたるよ、此の善き菓木より見事なる菓物を得、其の涼しき木陰に我妻は息ひ、又其の風に囁く葉の中に鶯は我等の愛を歌ひたるよ、此老木は殘し置くべし、蜂は花より密を集め我に富を與ふるなり」と大に首肯きけり。

斯くあらゆる方便の盡くる時、利益の綱にて結び止むれば、人何れも感謝の念を起すに至るなり。

利益は人を動かす最良の器械なり

智き誡

飛魚其生涯に飽き「我身は鷲の待ち居るが故、空中にも揚がること能はず、又海豚の伏せ居るが故、水中にも潜ること能はず、かゝる窮屈の生涯を渡るは母上は好み給ふべけれど、我身は最早忍び得ず」と訴へければ、「我子よさないひそ、此の不思議なる世に生活の道あり、其を御身に聽かせん。御身と我身との如き中等並々の者は、餘り高くあがり、又餘り深くもぐらんと試むべからず」と優しき調子にて戒しめ諭しけり。

己が身の程を知らずして濫りに不平を唱ふる勿れ

說敎師の狐

年老いたる狐、體は前程自由ならず、氣も大に挫けしが、學識深く、智惡優れ、論辯巧なりければ、生活の道の助にもと、森に行きて傳道を試みけり。其說敎は、仕組も整ひ、趣意も宜しく、質撲、德行、正實の三段に分ち、是ぞ眞實の幸福の基にして、此道の外には、僞多き世の中に、如何に多額の金錢を積みて買はんとするも、全く其幸福を得ると能はずして、皆徒なる望となるべきを示せり。始の程は其說敎の効なく、聽衆も少く、折々栗鼠などの、心なく出入するに過ぎざりしかば、狐は並々の事にては、說敎師の大名を轟かすとの成り難きを悟り、遂に心を變へて、其論鋒を惡逆無道の者に向け、大膽に獅子、虎、熊を始め、山中の猛獸を餘す所なく攻擊し、其の血を好み、慾を逞ふし、殘忍暴戾無慈悲にして、邪を愛し正を嫌ひ、利己主義のために、戰爭を起す事等の罪を指して、一々痛く非難しけるに、忽ち聽衆群がり集り、鹿、羊、山羊の類、其能辯に深く動かされ、其の弱者を憐む義俠の精神に感じて、淚を流さぬ者とてはなく、其名譽は遠近に鳴り亘り、國々に傳はりきこえ、遂に獅子王の御殿にまで達しければ、此獅子王、世間惡風の行はるゝ其時代にては、心優しく、信仰厚き君なりしにより、尊き敎をきかんとて、其の名高き說敎師を宮中に呼び招きけり。說敎師は王の厚き禮に感じ、直ちに其求に應じて、說敎を始め、其勢常にも勝りて一際勵しく、宛ら霹靂の落ちかゝるが如く、血に飢ゑ渴く、山中の惡獸を責め、無道の壓政を用ゐて、罪なき者を苦しむるとの無情を示し、力を誇り權を愛する者の諸惡を數へ、弱者のために、正義のいつかは出で來りて、必ず讐を報ゆべき事を告げ語りければ、此宣告を聽いて、肉食を好める獸等は、皆怖れて震ひ上がり、宮中の者共も、其の遠慮なき言語に互に顏を見合せ居りけるが、王の常

にかゝる事に抑れ、差し止むる様子もなく、喜んで聽き居り給ふを見て、批評するとをも憚り居りけり、説教終り、王は非常の滿足にて、其大膽なる説教師を御前に召してありがたき、教を謝し、「此禮には何を取らせんか」と、問ひ給ひければ、彼は此時本價を現し「願はくは雞を給はれ」とぞ答へける。

宗教を口にして人の慾を制せんとする者、又或は其慾を逞うす。

蔦漆の權勢(以下三種自作)

森の中に立てる大木に、蔦漆攀ち上り、其位置の高きを喜び、枝を出し、蔓を延ばして、他の蔦蔓には、上るべき余地を與へじと、十重二十重と、絡み着き、人も獸も近づけまじと、毒氣を出して、常に豫防をなし、已が仲間のみにて、蔓延り榮え居りけるが、餘りに液を吸ひ絞りしより、其身を寄する大木も、次第に弱り衰へ來り、遂に命の源盡き、さしも時めきし、蔦漆も、昔の勢にも似ず、看る看る枯れて木に絡まり、見苦しき姿をぞ殘しける。

已が黨のみを重んずる者は、國家を危うす。

僧と水神

一人の僧、已が身に附き纒ふ、煩惱の心の、去り難きを厭ひ、世を捨てゝ山に入り、修練怠りなく、或る日、山の麓を流るゝ溪川の道に出で來り、其の清く澄み亘りたる色に已が心を比べ、潜かに羨み居りける時、俄かに夕立降り來り、看る看る濁水混じ入りしが、忽ち雨は過ぎ去れば、川は自ら元の色に澄みかへるを見て、益々感を起し、不淨を聽いて耳を洗ひし、昔の話に引き替へて、今此流に臨み、我心の汚を洗はじやと、しばし默想に沈み居り、風と目を開きて仰ぎ見れば、不思議や何時の間にか、水神現れ出でゝ、其前に立ち居たり、僧はひれふして、只管に山川の水の清きが如く、其心の煩惱を取り去るべき敎を請ひければ、水神は嚴

めしき容體にて、此川の清きゆゑんを汝しるか。水の澄めるは、石に觸れ岩に急かれ、折れて叉曲り、奔り流れて、一分時も止む時なきが故なり。滯れる水は腐敗を生ず、心を淸むるは暇なき働に如くはなし、汝能く此理を悟れ」と告げ聽かせけり。

　小人閑居して不善を爲す

犬の義理吠

或る夜、天を覆へる群雲、次第に晴れ亘り、一輪の月は輝き出でゝ、里靜かになりきたり、人々は眠に就ける頃、俄かに村の一方にて、犬の聲喧しく、其聲次第に處々に傳はりて、我家の小犬までも、騷ぎ立てければ、主人は起き出でゝ、其出來事を問ひしに、小犬は尾を掉りて近寄り來り、「村外れの貴人の家に、强盜の押し入りしとかにて、皆頻りに番犬の弱きを怒り居る樣子なれど、其事柄は、未だ確と相分らず」と答へければ、主人は推し返し、「其はさる事ながら、汝の吠ゆるは如何なる故ぞ」と再び問ひしに、小犬はしばし猶豫ひて、左ればなり、別に申し述ぶべき程の理由もなし、只吠えざれば、世間に對し、犬の務の濟まぬが如く思ひしによるのみ」と答へけり。

　小政治家は空しく人に連れて騷ぐ

エルシノアの白薔薇（續き）

（オフエリアの少時）　空花生

花笑ひ鳥歌ふ春の眺めもやゝ酣に、樹々の梢に新綠の衣やゝ色深くなりぬ。初夏の日影熱しといふにはあらねど、常の如く彼處此方とさまよひて、いたく疲れたればしばし憩はんとて前に淸き小川の流をきゝつゝ、さる木蔭にやすらひ、ジユサが母よりきける昔物語などなしけるを靜かに側にきゝゐたりしオフエリア突然ジユサの袖を扣へて

見玉へや、彼方を！

と指さす彼方を眺むれば、何處よりきたりけむ、乳の如く白き一疋のはなれ駒、美はしく裝はれたる鞍も鐙もそのまゝに、道邊の草をあさりつゝ、小川に沿ふて悠々として歩みきたる樣に、美はしき動物よ！とヲユサ吾れ知らず叫びいでぬ。如何に威高き駒なるよ、その勇ましき鬣に長くたれたる手綱は、古き物語にて讀みたるものにやあらむ。美はしきのみならでその柔和なる容姿！こは疑もなくさる貴人の愛馬なるべきを、如何にして此處にはきつらむ、その人は何處にゐ給ふならむ。といひつゝヲユサ馬の方にすゝみよりて、手綱をとり、その頸のあたりの柔かき毛にさはらんとせしとき、何と思ひけむ、駒は頭を振りて一聲高く嘶きぬ。默してその側にありしオフエリア、再び不意に呼び出でぬ。

見よ！ヲユサ！彼處の木蔭を、草のしげれるあたりに――御身は見出せしか？

彼の君は眠り給ふてか！その馬の木株より逃れたるをも氣つかぬ程に熟眠し給ふと見ゆ。とヲユサはオフエリアの手をとり、その人のあたり近く何者ならむ、と進み見れば、狩衣を着けたる一人の若者なりき。その眠れる間の面敝ひにとて上に載せられたらむと思はるゝ、帽子は全く地に落ちて、何の用をもなさゞりければ、その美はしき面影は彼女等の想像をたしかむるに餘りありき。

これほどの駒の主とも思はれたり！とヲユサは小聲に獨語しつゝその手の束縛を放れんとする駒を更に確と引とめて。たしかに貴公子、――姿かきゝたる面白き物語にあるが如き君なるべし。美はしき君！全躰いづこより來給ひつらむ、如何なる御方ならむ？仙國よりか？朝廷よりか？たしかに。などと漸次に聲の高まるをも知らず、あたり關はず批判しゐたるうち、熟睡

者は靜かに眼見開き、二人の娘がその駒の手綱をとりて己が前に立てるを見て、いぶかりながら、しばし打守りをれば、

貴殿が馬の彼方の路邊にさまよひゐるを見付けたればかくは引具しきつる。とジユサ靜かに首を下げて挨拶丁寧に口を開きぬ。

遊歷せる一武士の駒を、美はしき佳人の引具したまふ話は如何なる仙國にも見出され得じ。と云ひつゝ微笑を含んで起きあがり、彼女の手より手綱を受とりながら、たしかに予は天上國をさまよふ者なるべし、御身等はその美はしき住民にておはすならむ。

否とよ、妾は只このあたりの田舍娘にてはべるなり、これなるは母の預かれるさる方の令孃にておはす、といひてオフエリアを己が前にきたらしめぬ。

さはれ御身はたしかに地上の魔術者なるべし、吾等を迷はし玉ふに余りあり、さるにても御身の芳ばしき名を障なくは聞かせ玉へ、予はエリクと申すものなり。

君よ妾は問はるゝまでもなくジユサと申すものにて侍る

まことやジユサとやら、聞ける薔薇の花なるべし。こなたなるは尙ほその蕾なれど、やがて御身の如き美はしき花と匂ひたまはむ。予は予をかゝる奇妙なる場所につれ出したまひしブオチユーン孃に萬腔の感謝をなさゞるべからず、彼女はかゝる心地よき夢を見せしめたまひたれば。

ジユサとエリクの問答漸く佳境に入らんとする折りしも、駒に鞭うち意氣せはしく驅けきたりし一人の武士躰の者あり、敬やしくエリクの前に額づきて、狩は全く果てゝ國王陛下も將さに歸らんとして我君を召します早く歸へり玉へと云ふ。

こゝに於て、エリクは直ちに駒に打のり、左手に手

綱を支へ、右手に高く帽子をさし上げて、予は今國王の命に從はざるべからず、されど不日再び、吾か美はしき森の女神を見舞ふべければ、と云ひつゝ一鞭駒にむち打て雲を霞。

その夕、二人は家にかへりて、その日の出來事を漏れなく語りぬ。貴公子のこと、美はしき容貌のこと、白き駒のこと、鞍のこと、手綱のこと、使者のこと、速かに去りしことなど凡て語り出でたりき。されど只一つジユサもオフエリアも默だして語らざりしは、その間の意味ありげなる會話なりき。一はその事の全く己が一身に起りたるを以て之を包み、他は性來の控目勝ちの故を以て。

これより二人は小野の逍遥をはてたる後は、必ずこの木蔭にやすらひ、四面山の話しするを常としぬ。話は常にかはらず面白きふし〴〵なれど、森の木蔭は昨日の儘に涼しけれど、流るゝ水、飛びこう鳥、何一つ變はりしものゝありしとも覺えぬに、ジユサの音調のみ日々に沈みてきこゆるは何故ならむ。話の筋も幾度か齟齬して、より〳〵深き吐息のきこゆるは如何に、足は歩めども思は地にあらず、口は語れども心こゝにあらざるが如きは、そも如何なることを習ひそめ、如何なるものを思ひそめけむ。

かく沈みたるジユサの容色も今日は不意に輝きてみえたり。オフエリアが指さす彼方より、白き駒に輕快なる出立ちせるはたしかにエリク侯なり。渠は近くに及んで、忽ち駒を下り彼女等の前にきたり、満面に微笑を含んで森の女神に再會したる喜悦を述へぬ。かくて三人は忽ち親密なる間柄となり、緑りの草を褥となして、談笑嬉喜十年の知己も及ばざるべし。渠れ腰のものを解いて二人にとらすれば、二人はその袋を開いて、晝餉を馳走しぬ、かくて夕陽逸くも長く梢樹を寫すに驚かされ、各家に散し、朝露をふんできたり會し、

暫くは斯くして日々を夢現の裡に過しぬ。ジユサの眼中今は只一個のエリク侯あるのみにて、オフエリアは殆んど忘れたるもの丶如くなれど、オフエリアは敢て之を意とせざるのみならず、ジユサが樂しみを己がものとし、幼心にも一種の同情を以て彼女を眺めぬ。さればジユサとエリク侯とが睦まじく懇談する間にありて何の妨げをもなさゞるのみならず、常に無邪氣なる話の題目を捉へきたりて、彼等に一段の興味をそへしめぬ。その日の會合を終へて、なほ明朝の樂しみを思ひつゝ共に家路に歸る途すがら、ジユサ滿面に嬉笑を帶びて、うれしき思の調子にのり、語りいづるおもしろき物語をきくオフエリアの欣びはまた一入なりき。されど邯鄲の夢、龍宮のまぼろしさめさすく、これ等の光輝は再びジユサの面影を漸次に去りゆかんとする也。彼女が滿腔の喜悦を以て波うたせたるその愛情は再び深く沈まんとする也。內部の痛心は漸次にその擧止動作に蔽ふべからざる證明をなさんとする也。彼女は勉めてその憂を秘密にせんとて、相不變その嗜好る歌『そは美はしきやさしき駒鳥は吾が尤もよろこべるものなれば』をうたひ出せど、いつもその終りは吐息にきえゆきたりき。

幸にして淡泊なる家族の間には倘ほ覺られざりしが、オフエリアは早くも小さき心にその友の著るしき變化をそれと察し、己れも何となく鬱しがちの日を送りぬ。

一日一日彼女の憂慮は高まりて、衰弱も漸く目立つ樣になりぬ。いづこも同じ秋の夕間暮、二人は常の如く、吾家をいでゝ、いつもながらの木蔭にいこひけるが、ジユサ悲しさ堪へ難き風情にて、顏を蔽ひ、俯伏して聲を飲みて泣き沈みぬ。オフエリアもこの樣に泣きつかんばかりに悲しく、その側によりそひ、少さき聲して何故にかくは悲しみ給ふと問へば、ジユサは初

めて氣付きたらん如く、頭を振りて、欷歔のこゑを呑込みながら
きたり玉へ、家にかへるべし。途にて面白き話すべければ。
そはうれし、長き前、御身よりきゝたる話はおもしろかりき、再びきかせ玉へ。
如何に凄まじき風の吹きまくるよ！秋の夕へほど心細きものはあらじな、と云ひつゝ――ジユサは半ばどんよりと曇りたる夕空を仰ぎながら、見よ落つる木の葉はバラ々々と彼方に飛び、此方に舞へり、間もなく葉は悉く落ちて樹は凡て枯骨となりぬべし。而して冬――冷なる凄しき冬はきたるべし。枯木の森の逍遙何の樂みかあるべき。『彼等は柩に於て冬を裸體に運びゆきぬ』――との歌は實にまことと思ふなり。
そは悲しき歌なり、――ジユサよ欣ばしきものは、いづこにあるならむ？

げに何れにあるならむ？ゆきぬ！凡てゆきぬ！『彼はゆきぬ、彼はゆきぬ、吾等を悲みの彼方に殘して』――はいかに、！と云ひつゝ更らに沈みたる調子にて、うたひ出でぬ。

彼の君は再び來りまさぬかや？
彼の君は再び來りまさぬかや？
否、否、彼の君は死うせぬ、
よみの旅路にいでましぬ、
彼の君はいかで再び歸りますべき。

誰がうせしぞ？御身は妾を驚かし給ふ、とオフエリア――更に怪しみとへば、――ジユサ直ちに氣付きさあらぬ躰にて、誰れも死せしにあらず、誰が死せしと申せしか？彼等は死せしと云へど吾等は安全に家路にかへりつゝあり、さにあらずや、吾が親しき者よ、といひつゝ劇かに歩を早めぬ。途すがら梢に梟の鳴くをきゝて、「御身は彼のホツホをきゝたまはずや？見よ翼を擴げて彼

處の森に飛びゆきぬ、妾は今この鳥の昔ばなしをいたすべければ暫しき玉へや。

昔し〳〵さる處に、一人の聖人おはしけり。彼方此方を經めぐりて貴き御敎を傳ふるを業となし玉ひけるが、ある夕間暮れ、常の如く諸々方々をめぐり給ひし末、足疲れたる上に、いたく空腹を感じたまひ、とある菓子屋に入りその店頭の菓子、いづれにても、唯一つ施されんことを乞ひたまひぬ。然るに店の女主人はそを知らぬふりして、余念なくその菓子を燒きゐたりしが、いよ〳〵乞はるゝ。うるささに、今に燒きてとらすべければと云ひつゝ極めて僅かばかりの粉をとり之を燒きてみるに、人にとらするには尙ほ大きければとて棚におさめ、更にその半分位のものを燒きけるに、尙ほ人に施すには大きく、更にその小さき一部分を燒きこれなればと手にとりみるに、己が食べんには余り小さけれど、人に與ふるには余り惜しければと復たそれをも棚に治めぬ。この樣に聖人も流石に默したまはず、大喝一聲、爾ぢの如き貪欲者が人間の形して、かゝる家屋に住み、かゝる衣服を着し、かゝる暖爐に身を温るは妙亭至極なり、今よりは爾ぢは、鳥の種族となり、空に鳴き草に眠り、彼方此方の梢をあさり、彼面此面の野邊をさまよひ、僅小の食餌を得るものとなるべし。その言葉未だ終らぬに、彼女は眼大くきらめかし、忽ち翼を擴げて烟突の口より飛び出で、遙か彼方の森にゆきて、それより毎夜〳〵ホツホーホツホーと悲しく鳴き渡るなりとのことになむ。

＊　＊　＊　＊　＊

その夕、吾家にかへりたる後、オフエリアは常の如く靜かに床上に横はりぬ。終日山野に遊びくらし、四肢の疲勞を一身に負ふての事なれば、枕に頭の蹈るゝや否や忽ちすや〳〵と樂しき夢路に入りしは昨日までのオフエリアなり。今宵はいかにせしぞ、眼をつぶ

れど眠氣催さず、夜はいよ〳〵深けゆけど心はいよ〳〵さへわたり、この日のジユサの一言一行交々念頭に浮び出で、何となく悲しく何となく心細く、輾々反側、思ひ極まり神身疲勞しはてゝ、いつしか睡にゆきしと思へば、忽ち惡夢に魘されて、身には一面に冷汗を浴びぬ、ウツラ〳〵として眠るか覺るか、夢か現の境にありしと思ふ多時、ふと眼を開けば室内暗憺として一物も辨ぜず、腕をのべて側にジユサを探るに、こはそもいかに？手に觸るゝものは只枕と夜具とのみ、驚き起きいでゝ靜かに階下に耳を澄ませば屋中屋外寂として、一語あるなし。さても彼女は何用ありてこの夜半に寐間を忍びいでたらむ、今宵はジユサと吾身とは共に眠らざりしにや？

とつおいつ、怖は〳〵ながら、靜かに床上を忍びいで階段を下り、居間の戸口まできたりしが、忽ちその戸の間隙より洩れ出る數條の光線を認めぬ。さてはと思ひ、手をのべて懸金を試むるに、戸は容易く開きたれば不意に彼女の上に滿空の光線を浴せられたれば、しばし眼眩みて進むあたはず、そのまゝ戸口に立ちて室内を凝視するに、その中央に置かれたる食卓には白き布もて敝はれたる一團の長きもの横はれり、その一方の端に數個鐵製のランプ煌々として輝きぬ。さても不思議とふるへる足に力をこめ、その最も光明に近きあたりの布をはぎみれば、あはれ〳〵こは彼女が最も親しき最もよく知れる人の不思議なる面影なりや？斯くまでに青めて凄き姿は、果してジユサなりや？呼吸もせず、土色なせる唇は兎の毛ほども動かず、殊にその瞳は半は開きて睨むが如く一方を凝視してまばたきもせざる物凄き、彼女は思はず口を開いて、御身は吾が友なるジユサなりや？と問ひけるに答へなければ、もとかしさに堪へず指を差出して、その頰に觸れしが氷の如く冷かなるにキヤツと一聲高く叫

んで、ジユサの死屍に抱きつきぬ。
鋭き小女の叫聲をきゝつけて、ボチルダは急ぎこゝにきたり、滿心の悲腸を志ぼりて、小女の驚愕を慰解し、やがてその床戶に導き、倘夜の明くるには時あればとて己が腕を枕となさしめ、種々なるおもしろき話しに、眠を催さしめんと勉めぬ。されどその夜は殆んど勞して甲斐なかりき。これよりボチルダは夜な〳〵オフエリアの側にそひねしてジユサのことを全く忘れしめんとしぬ。されどその夜小女が受けたる感傷は深くその心裡に志みわたりて、到底とりさるべくもあらざりき。實にこの時よりオフエリアは終生全滅し得べからざる鋭敏なる感情を刻みたるぞ是非もなけれ。
ボチルダのそひ寢も早や二ヶ月餘りになりければ、今はオフエリアも稍々元の靜穩に復したりと思ひけるより、其後は彼女が眠りつくまでを見屆けて、おのれは再び己が部屋に去りて眠ることゝなりしが、ある宵のことオフエリア獨り殘されて、覺束なき夢を結びしが、忽ち怖ろしき夢に魘され、驚きさめぬ。そは彼女が今一度ジユサに會はんとて暗を辿り土を掘りて、その墓に下りゆきしが、漸く地下幾層の間に、ジユサの面影を見しと思へば、何事ぞ、そはジユサにあらずして、泥にまみれ、顏面青ばれ、髯茫々たるウルフがその大なる口を開きて、鼻を鳴らし、冷かに笑ひつゝ、棺の內より出できたり、彼女の手を捕へて一攫にほふらんとする一刹那なりき。眼を開けば四壁昏然として咫尺を辨ぜず、靜かに床上に坐して見たれど、何となく空怖ろしく、起つて室內を見廻せばあたり寂として、いよ〳〵心地啻ならず、偶々白き窓掛のほの白く見ゆるをたよりに、窓の戶によりそひて、外面を眺むればいつの間にふり敷きけむ、地は一面に白妙の臺をなりぬ。仰ぎみればどんよりと、うち曇りたる黑雲の間より、上弦の月かすかに凄光をもらしぬ。かくと見て

再び床上に横はり何氣なく、再び室内を見渡せば、いつの間に襲ひきたりけむ、ほの暗き月明り、どんよりと室内の器物にうつり、いよ〳〵物凄き光景を寫しぬ、眼をとゞめてよく〳〵見れば、彼方の隅に、手もなく足もなき一團の黒影、おともなく動き初めぬ。それと見し小女は全身を慄はしつゝ夜具引かつぎ、面を包み仰ぎざまに身動もせず、意氣を殺せど、胸の動氣はいよ〳〵急に、ます〳〵高く、齒ぐきぶる〳〵振へて、齒の根あはずあはや一口かと消えいる思しけるうち、忽ち奇しき物音あり、さてはいよ〳〵吾が夜具を取り去ると見えたり、高く叫んでボチルダを呼ばんとすれど喉はつまりて、口は何物にかふさがれたらん如く、泣きもえならず、言葉も出でず、今か〳〵と絶え入るばかりに苦しみ悶ける時再び怪しの物音あり、よく〳〵耳を澄ませば室の外らしきにホッと一意氣と思ふ間なく、戸外に馬蹄のひゞきして、この家の門を打叩ける樣なれば、彼女はいよ〳〵元氣を得、夜具恐る〳〵かき上げて窓のあたりを窺へば、炬火の光りかすかに窓にうつりぬと思ふうち早や何者か階級を上りきたる響きして、忽ちこの室の戸は開かれ、煌々たる光りを先きにつゞいて入りきたりし人は飛ぶが如く小女の傍にきたり、うれしさ堪へ難き風情にて、

吾兒よ！ 吾が愛する兒よ！ 吾が幼きオフエリア

よ母樣!?

と答へてみたれど、全く夢の如きこの夜の始末に、安き思もなく抱かるゝまゝに、その手にゆきぬ。再び掌中の玉とせし母は欣びに堪へ難く、しばし涙にくもりし眼おし拭ひ、オフエリアの姿つく〳〵打守るに、數年の間に著るしく育たちたれど、何處となく打沈みたる面もちに眼のみキョロ〳〵と鋭く輝き、朱唇は絶え間なく慄へ、且つはおのが頰に一條二條のおくれ毛ありしを、なつかしげにその手をのべて觸れしとき異常

の熱あるを感じたる母のこゝろや如何ならむ。

温かに、靜かに母はその兒の不穩を安せんと勉め、燈光を兒の背に受けしめて、その疲れたる眼をつぶらせ、左手にその優しき手をとりて靜かに臥さしめ、額には絶間なく冷水もて、不時の熱を沈めやりつゝ、底き調子にうたふねんね歌、小耳にきゝつゝ安らかに眠りにつきぬ、と見ればまた程もなく忽ち全身に異樣の戰慄を起し、何事とも知れぬ囈言を言ひはじめ、あるは遽かに鄙歌の一二節を歌ひいだし、あるは眼を開き腕をのべて、母の胸によらんとするもの﹅如く、左右に動かし見て、漸く己は固く母の胸に抱かれゐるを見出しまたすや／＼と眠るなり。あはれこの可憐なる有樣を始終側にありて見守る母のこゝろや如何ならむ。

その翌朝、オフエリアは全くその熱氣より回復したれば、母オードラはその兒を連れて再びエルシノアの故園にかへりぬ。（未完）

史談

泰西婦人界

讃美生

泰西社會にあつて婦人の職業、位地、勢力、これを見れば一目の下に瞭然たらん。彼の婦人と社會を識れば、以て我が婦人と社會を識るべし。

（一）ヘレン孃（畫人）

ヘレン孃はアレキサンダー、ヘンリー、パターソンの子、千八百四十八年、バートン、オン、トレントに生る。

彼は、普通敎育を郷里に受け、十九歳（一八六九年）の春、倫敦に之き、其伯母バッターソン孃の開ける畫學校に學ぶ。業成り、筆を執つて府下の諸新聞雜誌に提し、後グラフヒック雜誌社の客員となり、同時にコー

ソヒル雜誌に載する諸小説の挿繪を擔任し、傍ら又水彩畫を修錬す。彼の擇出て取る所の題目は、英國田園の景致を主とす。『五月』『收獲時』『井』等以て其趣好の一斑を見るに足る。彼は二十六の時(一八七四年)詩人ウ井リヤム、アリンガム氏と相愛し、遂に伉儷となり、其の清雅なる風神を以て、大に良夫の筆を動かす。彼又近年多くトマスカライルの肖像を摹寫す。千八百八十六―七、兩年に開かれたる、アリンガム夫人の丹青展覽會は、大成効を以て閉されぬ。

(二) エリザベス、ガレット女史(醫師)

エリザベス、ガレット女史は、千八百三十六年倫敦に生れ、家庭及び私立學校に敎育せらる。後醫藥の事をミツドルセツキス病院、及び倫敦醫院に修め、アポセカリース館に於て試驗を經、免許を得。時に年二十九。翌年セントメリー藥院の屬員となる、越て四年、巴理より醫學博士の學位を受け、同年、イーストロンドン小兒醫院、及び婦人藥局の醫員に擧げらる、翌年、濠洲通ひの船主チー、エス、アンダーソン氏に嫁す。一八七二年、アンダーソン夫人は自から婦人病院を興し、醫員以下盡く婦人を用ひ、同時に婦人醫學校の囑托講師に聘せらる。千八百八十五年始めて濠洲に遊び、歸りて又專ら小兒、婦人の病を治す。彼は現今ブリチシユ醫會の一員に推され、屢醫事及び社會問題を論ず。

(三) ブレイク孃(作家)

ブレイク孃は、愛蘭の名族の子、千八百四十六年バス地に生れ、幼にして文辭を母に學び、長じて之を巴理に學び、漸々にして詩人となる。彼は時の大家テマルチンの看護の下に、無韻の史詩を屬し、詩成つて之を公にし、讀詩社會の好評を博す。彼は此の處女作の成効に奬まされて、多くの戯曲を作す。『一代競爭』の如き其の傑出せるものなり。彼は又劇詩の朗詠に巧なり、其『血と詩』最も世に行はる。猶は『塔の歌、及び雜

詩』の著あり。是より先き千八百七十七年、彼は當時知名の美術家ミスター井リヤムゴー井ング氏に嫁せり。

(四)バンク夫人(作家)

詩人、小說家として、高く英國文界に頭角を顯はしたるバンク夫人は、千八百二十一年マンチエスターに生れぬ。彼が『垂死の女及び其母』と題する處女作を公にして、讀詩社會、殊に婦人界を動かしたるは、僅かに十八歲の妙齡なりき。之に繼ぐに『葛の葉及び雜詩』と題する著作を以てして、又江湖に歡迎せられ、彼の名聲は遂に時の壯年詩家にして日報記者なる、ゼオヂリニアス、バンク氏の愛慕を贏け得て、二個の詩人は一となれり。是より夫人は其の艶筆を以て良夫の事業を助け、傍ら夫妻の詩曲を合して、『叢間雛菊』なる名を附して印行したるが、其中樂器に上らざるものは何もなかりしと云ふ。結婚後續出したる散史中、最も傑出したるものは、『天佑の家』と題する小說なりき。彼が文學上の位置是に由つて文界に樹立す。是より以後、彼は種々の題目の下に、ノース、カントリー、井ルトシヤイア、ランカシヤイア、ヨークシヤイア諸冊の物語を綴り、猶ほ『時計師の女、其他の物語』及び、『シビラ其他の物語』と標する三冊の大作を公にす。彼の晩年の詩卷は『Ripples and Breakers』(漣波及び細波の義)の名を以て世に出づ。彼は猶ほロンドンの重なる雜誌の爲に筆を執り、其のハロケイトに栖める間、『過去の婦人、現在の婦人、未來の婦人なる問題を講したり』。彼は老ひて益壯。

(五)ビーア女史(作家)

ビーア女史は一千八百三十一年ランカシヤアに生る、彼はグラスコー高等小學校に入となり、十九歲にしてロハートバー氏に嫁し、一千八百五十四年夫妻相携へて米國に往き、米國にあると十餘年にして、黃熱の爲

に良夫と三兒とを奪はる。彼は復た嫁せず。專ら心を餘兒の敎育に注ぎ、漸々筆の人となれり。彼は諸新聞雜誌に筆を執るの傍、小說の著作に從事し、一年一種若くは二種の比例を以て、一千八百七十二年より、以て今日に至り殆ど二十餘種に上るも猶は休息せず。

(六) ホーア夫人(健足家)

ホーア婦人は、旅行家ホーア、エトワード、クード氏の細君にして、クード氏と一對の旅行家たり。彼は千八百五十三年、ロンドンに生れ、クヰーンカレヂに學んで優等なりき。彼はクード氏に嫁して後、千八百八十二年先づ中央亞弗利加より發足したるが最初の旅行にてありき。彼は此時、サーダンより、マムブリアまで、內地二百里の間に乘車を試みたり。千八百八十四年、ク井リメーンよりタンガニカ湖の旅行を取りぬ。彼は發程後五日にして、クワ〳〵河を渡りしも、葡萄牙人と土人との戰爭の爲め、前途杜絕したるが爲め、引返さゞるを得ざりき。一個月の後、彼は其夫とデラ、コア港に會合し、夫婦並んで舊道よりウヂヂ以內の地に足を進めぬ。白人中の婦人にして、始めてタンガニカ湖水に先登の名譽を博せしものは即ち此の婦人にして、タンガニカ湖案內記者の名譽も彼のものなりしなり。彼は又四年間カヷラ島に滯在して土人の子供にクリスト敎と文明の初科を敎ふるの勞を取りき。彼は今其夫に伴はれてポリテシアにあり。平生中々の元氣にて、願くは跣足を以て世界を一週して見たしと云ひ居る由。

(七) シユマン夫人(音樂家)

マダム、シユマン、は千八百十三年ライプチッグに生れ、幼にして既に非凡なる音樂の才を發露せり。彼は重に其の父フライトリヒ、ワイク氏の薰陶を受け、十歲にして早く既に公衆の前に演技し、十二歲の時ライプチッグに有名なる、ゲワンドース坐に上れり。是より歐洲を漫遊し、ウ井ンナ、ベルリン、巴里、到る處に

風流社會を振動したり。千八百三十七年、彼は當時音樂の大家ロバート、シユマン氏の愛する所となり、三年の後、遂にシユマン氏の室となる。是よりシユマン氏の薫陶を得て、彼のヒヤノ技殆ど造詣す、是までは唯偏にビートベンの樂譜に束縛されたりしが、是より多く近世の樂譜作曲を渉獵したり。千八百五十六年夫死して後、兒女を携へて日耳曼中を遊歷し、到る處に名聲を博し。千八百八十六年、ロンドンに來りてセントゼームス舘に演技す。

(八)　○○○○○○○○クリスチアン親王(皇族)

大ブリテン、エンド、アイルランド、の彼ローヤル、ハイチス、ヘレナ、オーガスタ、ヴ井クトリヤ親王、エンドサクソニーの女侯は、大ブリテン、エンド、アイランドの女皇、彼、ローヤル、マゼスチー、ビクトリヤ陛下の第三女に在し、千八百四十六年五月誕生ましまし、千八百六十六年スレスウ井ク、ホルステン、ソンダーベルグ、オーグステンベルグの渠ローヤル、ハイチス、フレデリツク、クリスチヤン、チヤールスオーガスタス親王(一人の名なり)に嫁し玉ふ、衆議院は恭しく、三萬磅の化粧料と六千磅の年金とを献納したり。

(九)　○○○○○○○○バーチツト女史(小說家)

若松賤子が飜譯して一時江湖の喝采を博したる小公子(リツトル、ロード、フホントルロイ)の作者こそ、このハーチツト女史なれ。彼は千八百四十九年マンチスターに生れ、十五歳まで、鄉里に入となり、尋で父母に携へられて米國に往き、テンチツスに長じ、二十歳の頃より短篇小說を綴りて、雜誌に投じぬ。千八百七十二年『剛愎なるトムの困却』てふ一篇スクリブナー雜誌に出で、尋で書物と形はれたるは、渠が成効の先駈なりき。是より一種若くは二種、毎年繼ぎ出で、千八百八十六年に至つて『小公子』の作あり。今に到つて猶は筆を棄てず。『小公子』は獨り米國に於てのみならず、

本國の讀詩社會にも宣傳せり。彼は嘗に千八百七十三年、博士バーテット氏に嫁せり。バーテットとは何人ぞ、僅かに夫人に由つて其名を傳ふるのみ。

家　政

注意したき一ヶ條

蘭　芳

讀者も知り玉ふらむ、二百餘年の昔、專ら武家に行はれし騷動打の話を。たとへば何某、妻を離別して、五日或は一ヶ月の內、新妻を呼入るれば、初めの妻より、必ず騷動打を企つ。先づ老功の親類女と談合して(男は絕えて關係せず)親類中の達者なる女を二十人五十人百人も、身代によりかり催し、新妻の方へ家老をつかはす。其口上は『御覺可有之候、騷動打、何月幾日何時可參候』といふ、道具は大方はまないなり。此申込を受くるや、先方にても、少しだも弱氣を見すれば、一生の大耻なれば『成程相待ち候』と返事す、男は唯此使の取次のみにて、其後は一切出合はず。偖約束の期日に到れば、離別の妻は乘物に打乘り、供女は皆徒歩にて、くゝり袴に玉襷、髪大童にふり亂し、白綾の鉢卷、かいかいしく、まないをもち、押寄せて、門をひらかせ、臺所より亂れ入り、鍋釜障子、あたるを幸にうちこはす。時分を計り、妻の仲人と待女郎、先妻の時の待女郎、同時に出會し、眞中へ入り、さまざま言葉を盡し、漸く返すが常なり。其頃の女は騷動打に、二三度賴まれぬはなく、或老媼は八十年の間に十六度賴まれ出しものありとぞ。

此は可笑しき、野蠻なる話なれども、戰國を去る久しからざりし當時の婦人の、如何に氣象つよく、身躰も健やかに且朴直なりしかを、知るに足る可きものならずや。當世の婦人は、中々悧巧優美になりて、斯る事

は、野蠻時代の昔話と笑ひ去れども、然らば今の婦人は、之を笑ひ得る程の氣象ありや、あまり贅澤に、あまりかよは〳〵なりし患なきや、文明は文弱と、同意義とならんとするの傾きなきやと考へ來れば、頗る覺束なき次第なり。日清戰爭には、靜淑にして然も豪健なる、日本婦人固有の美質猶顯然として我國に存することを表はしたるは事實なれども、靜かに考へ見れば、少なくも我上中社會の婦人は、一方に於て大に進步したると共に、亦一方に於て豪健朴直の點に、大に失へる所あるを免れず。斯くては爭で膨脹する大日本の母たり妻たるを得むや。さらば如何にす可き。第一に注意したきは健康の事なり。健全なる精神は、健康なる身體に宿るにあらずや。健康なき婦人いかで豪健の氣象あるを得ん。（素より例外はあれども）健康なき婦人いかで健全なる子女を生み、幸福なる家を作るを得む。不健康なる婦人いかで元氣あふるゝ國家を作るを得む。神經質にして猫の啼くにも頭痛する婦人は、卅珊の大彈丸雨の如く飛び來る軍艦の上に、自若として立つ將校兵士を作り得べきや。肺病にて二三步步みても喘息する婦人は、南洋のはて、中央亞細亞の中、熱砂を渡り、氷山を攀づる探險者を產み得べきや。胃病にて常に伸吟する婦人は、一生を學問に委ねて、寂然たる室內、人知らざるの所、宇宙の眞理宇宙の勢力と格鬪して、之を擒にする大頭腦の學者を出し得べきや。渡舟にも醉ふ如き婦人は、大平洋より印度洋まで、縱橫せんとする海國男兒を作り得べきや。腕力は婦人の誇る可き力にあらざるは勿論なれども、騷動打は野蠻極まる事なれ共、しないを提げて相手の家に亂入するはさておき、しないを双手に擧ぐることすら得せざる（此は譬へて云ふなり、我姉妹にしないを取り給へと云ふにあらず）位の健康なる婦人は、日本國の基礎石を背負ふ程の働出來べきや。軍艦を作り大砲を

鑄るは、今日の急務なれども、健康なる婦人を作るは百年の急務なり。

健康なる婦人を作るには、幾多の心得あるべし。兒女の養育の如きも、注意し改革す可き所多からん。敎育なき婦人は敎育なき爲めに無用心にして兒女の健康を害し、敎育ある女は敎育ある爲めに用心過ぎて却て兒女の健康を傷ふ。學問と實際の調和、注意す可き事なり。また女學生の躰育は、近頃大に當局者の注意を受け、躰操長刀など課目に加へられたるも、猶勉强時間の多きに過ぐるの觀あり、また躰操などもたゞ戯の如くして終るものなきにあらず。此等につきても注意すべき所多かるべし。然れども兒女學生は猶其健康を世話するの人あり、世話するの人なくして注意を怠り易き機會多く、從て尤も注意に注意すべきは、一家をもてる婦人の健康の事なり。

勞働する婦人は、勞働によりて健康を得。然も田舍にては兎も角も、都會にては、中上社會の婦人は、手足よりも氣を使ひ、心を使ふこと多し。或人の言へる如く『子を負ふて煉瓦の荷車を押す婦人は案外に强健にて、黑塗の馬車の内に、しば／＼顔色蒼き婦人を見るも、下町の下女は牡牛の如く肥え太りて山の手の奥樣に頰殺げて眼つり唇に色なく顔に角ある一見春の夜主人の『細君』を思はしむる者多きは、著しき事實なり。さらば如何にす可き。願あらば、こゝに道あり。日曜の家族外遊、(事多きを辭柄とす可からず)四季の山遊海遊、(主人獨遊の風を止めよ)夏の避暑遊(平生節儉して、事情の許す限りなせよ)花園小樂園、(若し餘地あらば。華聖頓の言に、農業は人間百業の中最も高尙なるものなりと云へり。我等の母なる、土を尊べ、土ぜせりを穢しき事と思ふなかれ。自からの爲になり、子女の益となる)船遊、(海國民の母なる日本婦人たるを忘る可らず)適宜の勞働、(已にこれを實行

する者はよし。然らざる者は、自から思ふて之を行なへ）其他人により、時に應じ、處に從ひ、爲すべき道多かる可し。

豪健の氣象は健康より生じ、健康はまた美を生ず。西洋に於ても、巴里婦人は其意氣なること、世界第一なれども、其眞に美なるは、英國婦人に及ばず。此は自然の花の如く、彼は造花に似たり。一は活々たる日向の花にして、一は日陰の花なり。英國婦人は未婚既婚を問はず、尤も健康に注意し、戸外にいで、馬に乘り、氷すべりをなし、自轉車を走らし、甚しきはアルプスの高山に登り、ラウンテンス、舟遊等を務め、佛國婦人は然らざるによつてなり。

第二に注意す可きは、質素勤勉の風を進むる事なり。凡そ文明は便利を生じ、便利は奢澤を生じ、奢澤は惰懶を生じ、懶惰は羸弱を生ずること自然の勢なり。田舍にては左もあるまじけれど、都會には百便備はり、錢てふ打出の小鎚さへふるへば、米は雪の如くつきて自から米櫃に來り、豆腐は望通りに切られ、洗へる芋は鍋に入り、炭薪は俵藤太の米の如く、盡くる間もなくまた滿ち來り、其他衣服の事殆んど擧手投足の勞もなし、其結果は、人をして奢侈ならしめ、勞働を厭ひ、勞働を恥ぢ羸弱ならしむ。斯くては婦人の元氣、何處より來る可きや。勞働を尊敬す可し。質素は家の守、身の守とせよ。內はよく外を牽ふれども、外は往々內を變ず。衣服の如き、一家一國の興廢に大關係あるなり。髮結の錢、身のまはりの奢澤、其費左程大ならざるが如くなれども、日本國中に陟れば、以て日清戰爭の幾月日を支ふるに足る。

質素勤勉、唯四字なれども、我國の婦人之を實行すれば、其家國に及ぼす所如何ぞや。此四字の必要人皆說く、之を行ふはおの／＼心がけなり。

素質と、勤勉と、健康とは日本婦人の元氣を作る三條

の重なる源流なり。互に原因となり、結果となり、相待ちて幸福なる人を作り、幸福なる家を作り、膨脹的國民を作るものなり。

諺に曰ふ、其刀を短ふする者は、其の國境を廣ふすと。此は國民の勇氣元氣の、國家の勢力に必要なることをいへるなり。スパルタの如きは短刀を提げて威を東歐西亞に振へり。然もスパルタの根底には、丈夫を生めるスパルタ婦人あり。健康にして質素、朴直にして勤勉なる、氣象豪健のスパルタ婦人あり。新日本の婦人は、更に教育ある、更に進歩せる、スパルタ婦人ならざる可らず。

主人の位置

しばのや

一、主人の位置は上、一國の君主より下、貧家の者に至るまで共に享有する天爵なり

二、主人は家族の代表者、其正直の辯護人にて國家の爲めには公民、家族の爲めには其頭領として尊敬せらる

三、主人は獨身者の如く其身一人の爲めにする心配にあらずして皆其妻、其兒、其職務、其他の家族を其注意の目的とし總ての家族の父、後見、保護者、朋友、顧問なり

四、彼等の爲めには耐忍を以て不愉快をも堪へ彼等の爲めには常に面悟するだも好ましからざるの人にも服從す

五、主人は妻子の爲めに薔薇を有するの荊棘なれば其荊棘を折り妻子に其滿足其名譽を與へざれば身自らも滿足と名譽はなし

六、其家計の爲めに盡さず妻子を顧みず注意せず貧苦ならしむるの主人は其職に堪へざるなり

七、斯の如き其職を盡し得ざるは人間の感情を害し社

會の毒物耻辱となる

八、保護を受くべき夫の前に常に震へつゝある婦人ほど哀れむべきものは他にあらじ

九、此不幸なる婦人は世に離れ人に棄られて只一人其加害者と共にあるのみ夫の名は婦人の名、夫の名譽は婦人の名譽なり

十、他人に後言を聞かざらしむる爲めには其拷問者の慘酷をも隱し其身を罵るの口をも賞め其身を鞭つの手にも媚びざるべからず

十一、夫に隨伴して日々生ずる家計上の關係は婦人の爲めには寃死者の冠に於ける新き荊棘となる

十二、汝は賢き主人たらんと欲せば汝の「ホーム」に怜悧と愛とを以て順序、勉强、從順、品性を維持せよ此等の德は「ホーム」に存在する幸福の大黒柱なり

十三、順序を立つる所と各人が其義務に服する所には反對の生ずる事なく細事の爲め夫婦間に風波を起す事なく小兒及婢僕の爲めに惡例を示す事なし

十四、「ホーム」の諸人が協力一致することに注意せよ汝自らも「ホーム」の紀律には服すべし

十五、家族と共に勉强なれよ仕事は汝が所有物を增し又單に之を維持するが爲めにも必要なるものを能く整理しある「ホーム」には怠惰者は一刻にても留むべからずして各人は諸人の爲め互に援助すべし

十六、愉快と愛情を以て爲すものゝみ能く且充分に成効せらるゝものなれば汝は汝の小兒及家族の愛を受け彼等には時々歡樂を與ふるのみならず彼等と共に汝の「ホーム」にて小宴を開けよ

十七、汝の小兒に從順を敎へよ其情を張らんが爲めにする涙にも、頑强にも阿諛にも動かさるゝ事勿れ若き時に心を屈せしむる事能はざれば年老ひて心に苦めらるゝ事なしとせず不行儀の子は汝の爲めに非常なる傷心を起すものぞ

十八、品性の嚴正を示し之を奬勵せよ之なくんば「ホーム」に平和なく又幸福なし「ホーム」に不善あるは國に盜賊、人殺しあると同一なり然りと雖ども汝自ら不善にしては他人の德を奬勵するを得ず

十九、神を說きて敬神の心を警醒し眞神に對して絕ゑず尊敬と敬愛を起さしめよ此等は賢き主人の王冠なり

二十、眞神の總ての贈り物は艱難にせよ欠乏にせよ禮を以て享受せよ何となれば此等も亦汝の力を强め汝の信仰を高め汝の心を高尙にし且汝が此世に有する物は皆凋落するものなりと諷諭するに必要なればなり

二十一、「ホーム」の諸人が眞神に同一の敬愛、同一の信仰、同一の希望を有するより他に親密なる連繫を與ふるものありや

二十二、主人が其兒と共に靜に祈願するより尊嚴なるものはなし

二十三、「ホーム」の一人が將さに永眠せんとし愛する主人に哀しき別を告げつゝ天を望みつゝ「吾人は暫時の間別れんとす今此處に握り居る此手、此世の暗黑を導きたる此手は又彼の樂土にて互に再び與ふる力と愛を持つ」と祈念するより他に心を感動し又慰籍するものありや

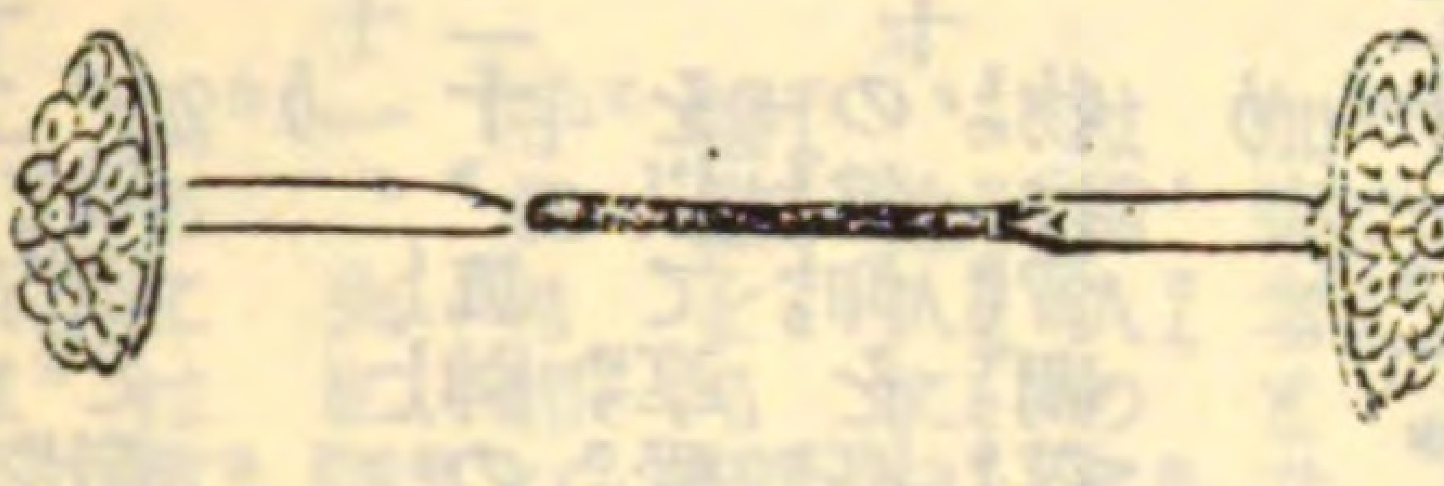
社交一斑

流行の栞　　春夢

千鳥うち

千鳥うちとは近來流行の髮のかけものにして、其うちかたは赤き白きたかひちかひに組みたる所は、是迄隨分ある形なれど、房に白縮を用ゐたる點は、此品の最も賞美する所なり、外見、意匠ともに淡泊を旨としたる品物なれば、世間に廣く流行するも理なきにあらず、此外に『九重』といふ新奇のかけものも出たれど、千鳥打の方面白し。

夏向雨てん



夏向雨てんとは挿圖に示したる通り、兩端の花模様は、蝶貝製の藐花第一等の流行なり、其品の賞せらるゝ點は、瀟洒淡泊の意匠にある歟、ヌキサシは自由なり、代價は一圓四五十錢なりと聞く

記臆術の流行

和田守菊二郎氏記臆術の發明の事情は、嚢に報道しまゐらせたるが果して昨今の流行とはなりぬ、東京市中各所に速記術の發明起り、大坂にも太田某の速記術の發明あり、大道には三錢記臆術あり、なか〳〵の流行なり、されば和田守氏は當今の流行ッ子なり、世間にても記臆術の研究といふよりも、寧ろ餘興に和田守を呼ばうといふやうになりぬ、

右につき井上圓了氏は朝日新聞紙上に於て其意見を發表せり、即ち錄して讀者の一覧に供す。

昨今世間にて喋々せる記臆術は余未だ其方法を知るを得ざれば之に就きて評言を下す能はずと雖も抑々記臆を善くする秘傳に就きては古來西洋にも日本にも種々の方法を工夫せるものありて決して左程珍奇の事にあらず余先年種々の方法を蒐集し其粹を抜き其要を摘みて記臆術講義と題する一冊子を世に公にせり其中には凡そ十餘種の方法を擧示し以て殆んど古今東西の諸秘術を網羅したれば同書を一讀せるものは必ず記臆術の何たるを了知すべしと信ず今左に同書に出せる科表を掲げて其一斑を示すべし

記臆法
- 學理的即自然的記臆法
  - 身躰上
  - 精神上
- 應用的即人爲的記臆法
  - 簡便法
    - 連帶法
    - 假物法
    - 略記法
    - 統計法
    - ○調法
    - 分解法
  - 方術的
    - 接續法
    - 必係法
    - 配合法
    - 代數法
    - 代字法
    - 算記法

而して世間に所謂記臆術は此方術的記臆法を意味し其方法たるや一定の方式を設けて多少の習練を要するものなり之に又數量を記臆するものと物品若くは事件を記臆するものと其方法自づから異なりて數量

を記臆するは物件を記臆するより一般に難しとなす今一々其各法を説明すること能はざれば詳細の事は之を記臆術講義に讓り唯此に物件記臆法の一二種を説明すべし

夫れ古來世間に傳ふる物件記臆法は余が所謂接續法、心像法、配合法の三法就中配合法によれるものを最も多しとす依て余は專ら配合法に就きて種々の方式あることを述べんとす先づ其法に要するものは原形（若くは原型）と材質との二種を設くるにあり原形とは記臆すべき物件を依託即ち配合する圖案、圖式を云ひ材質とは記臆すべき物件を云ふ而して原形は記臆者が常に最も明瞭に熟知暗記するものに就きて定むるを要す且つ原形は不變性にして如何なる場合に於ても變ることなきも材質は變化性にして記臆する度毎に變るものとす其他原形に就きて最も要する點は原形中に順序番號を定めて之を記臆するにあり更に左に其要點を表示すべし

一、記臆の材質を配合すべき原形を設くるを要す

二、原形は記臆者の熟知するものを擇むを要し或は習練により熟知するを要す

三、原形は一たび之を定むれば常に之を用ひ濫りに材質の異なるに應じて變更せざるを要す

四、原形中に順序を立て番號を附し豫め之を記臆するを要す

是れ配合法に於て注意すべき條件なり余が之を配合法と名けたるは材質を原形に配合する方法なるに由る而して其原形は記臆法發明者の工夫によりて定むるものなれば甲の秘傳と乙の秘傳と其用ふる所のもの固より異ならざるを得ず蓋し世間にて記臆術を發見せりと唱ふるもの多くは新に其原形を工夫せるに過ぎず此くして既に原形を一定すれば之に配合する方法を習練するを要す是れ全く習練を待ちて熟達するものなれども又人の性質に關して大に巧拙の異同なき能はず十人共に同一の方法によりて習練するも甲と乙と同一の進歩を見ること能はず要するに生來記憶力に富めるものは速に上達し記憶力に乏しきものは其進歩遲々たるを常とす

是より種々の例を擧けて原形に材質を配合する方法を述べんに其一法として己が身躰を以て原形を定むるものあり即ち身躰の各部分に順序を立て番號を附して頭上を以て第一位に置き額を第二位とし眼を第三位、鼻を第四位等とし之を原形と定め其各位に材質即ち記憶すべき物件を配合するなり例へば

一、頭上　二、額　三、眼　四、鼻
五、口　六、喉　七、乳　八、腹
九、股　十、足

の如き十位の原形を設けて假りに書物、筆、佛像、花、酒、手巾、袋、菓子、小刀、茶碗の十個の物品を之に配合するに第一の書物は之を頭上に戴くさして記憶し第二の筆は之を以て額に字を書くさして記憶し次の佛像は眼にて之を觀るさし次の花は鼻さ花さの音通を以て記憶し次の酒は口にて呑むさし次の手巾は喉に卷き付けるさし次の袋は乳をつゝむさし次の菓子は澤山に食して腹を張らせりさし次の小刀は股に傷つけしさし次の茶碗は足にて踏みつけしさして記憶するの類なり

次に第二法さして已が住居せる家屋を以て原形を定むるものあり其法種々あるべしさ雖も左に或る一書に定めたる二樣の原形を示すべし

一、總廓　二、門　三、中間部屋
四、玄關　五、襖　六、使者間
七、廣間　八、大座敷　九、床
十、違棚

一、障子　二、椽側　三、廊下
四、茶屋　五、坪內　六、手水鉢
七、飛石　八、柴垣　九、樹木
十、雪隱

是原形に十位を設けたるものなれども必ずしも其數十位に限るにあらず各自の工夫によりて隨意に二十位或は三十位を設けて然るべし其位數の多ければ多きほど多くの物件を記臆することを得るなり又其順序名稱の如きも必ずしも右に揭げし例によるを要せず各自其最も能く熟知せる家屋及び庭園に就きて適意に其順序を定むべし既に原形を定めたる以上は之に記臆すべき物件を配合せざるを得ず例へば源氏六十四帖を材質さして之に配合し以て其名稱を記臆せんさ欲せば第一位の總廓の傍に桐の木を植たりさして記臆し第二の門の內に箒ありさして空ゐ第三の中間部屋に入なくして蟬のぬけがらの如しさたさへ第四の玄關に使者の顏の出るさ記臆するの類にして餘は之に準じて知るべし其他此方法の一種に特に已が家屋中の一室を擇みて其內に常に備へ置ける戶障子物品等に番號を附して記臆する法あり或は殊更に記臆の便宜を計りて室內に特殊の裝飾を設くるも可なり

次に第三法さして一村一町の家屋を其順序に從て原形を定むるものあり例へば已が住居せる町內は西の端より東の隅迄各戶の屋號營業家族及び家內の間取迄熟知せるを以て假りに西端の第一は酒屋にして第二は砂糖屋、第三は大工、第四は町長、第五は八百屋、第六は寄席なりさ想定すれば之を原形さして之に新橋、品川、大森、川崎、鶴見等の東海道停車場の順序を配合せんさするに第一に酒屋の前に新き橋を掛けたり第二に砂糖屋の船が破壞して品々の砂糖を川に沈めたり第三に大工は大なる森林に入りて材木を伐る第四に町長は公用ありて川の先きへ出張せ

り第五に八百屋の裏に鶴が來りて多くの人が見て居る等と種々の連合を用ひて記臆するの類なり

第四の方法として大道に沿ひたる村落或は驛邑にして己が熟知せるものを擇み之を原形と定むるものあり例へば東海道五十三驛を熟知せるものは之を原形として之に材質を配合するなり然るときは五十三個の物件を其順序に從ひて記臆することを得、今假りに入の姓即ち長松、大橋、遠山等の諸姓を記臆せんとするに第一に品川に長き松ありとし第二に川崎に大なる橋ありとし第三に神奈川にて房總の遠山を見るとして記臆するが如し或は沿道の停車場を熟知すれば之を原形とするも可あり或は沿岸の村落を熟知すれば之を原形とするも可なり或は日本國內六十餘州を熟知すれば之に材質を配合するも可なり

第五の方法は年月を以て原形と定むるものなり例へば明治元年より廿八年迄每年起りたる重大特殊の出來事を原形と立て之に材質を配合するの類にして其配合の仕方は前の諸例に準じて知るべし或は一年中の十二ヶ月を原形と立て之に配合するも可なり例へば第一に記臆すべき物件は一月の氣候或は儀式或は其月に特殊の草木等に連合して記臆するの類を云ふ或は七曜に配するも可なり云々

と以て記臆術の秘密を開明するに足らん歟、

流行記者曰く本邦に記すべき流行物尠からざりしも、編輯期日に迫り挿畫等間にあひかれ遺憾ながら次號に延ばすこととなしぬ。

日用品物價（七月廿一日）

◎白米小賣（一圓に付）▲一等白米七升六合▲二等白米七升九合▲三等白米八升三合▲四等白米八升八合▲五等白米九升二合

◎雜穀本場大麥三斗二升●脇場大麥三斗三升●地廻稞麥二斗四升●新大麥三斗三升●船橋小麥二斗二升●下總小麥二斗三升●常州小麥二斗三升●千葉小麥二斗二升五合●札入竹林麥上一斗七升五合●並竹林麥一斗九升●大田麥—●佐野上銑割麥一斗八升五合●並割麥二斗●八之戶大豆—●船橋新小麥二斗二升●下總新麥二斗二升五合●常陸新小麥二斗二升五合●本石大豆一斗五升七合●支那古大豆—●室蘭小豆一斗三升●支那白小豆一斗四升五合●本場金時一斗〇五合●向地金時一斗三升●大和空豆二斗一升●播州空豆二斗一升五合●肥前空豆二斗三升五合●古河堺空豆二斗三升五合●同豌豆二斗三升五合●川越豌豆二斗三升●銚子隱元一斗四升五合●室蘭大玉隱元一斗五升●同中玉隱元一斗五升●同鶉隱元二斗●同サラサ隱元二斗二升●佐野搗粟一斗五升五合●白胡麻一斗一升●向地黑胡麻一斗六升●常陸黑胡麻一斗八升五合●川越同一斗三升●荏胡麻一斗五升五合●支那大豆—本場平豆一斗四升●同馬鹿白—●庄內平豆一斗四升●向地目黑白さ一斗八升五合●同目無一斗八升五合●本貫亮ソバ三斗●上粋五斗三升●越後大豆一斗五升三合●元山大豆一斗五升三合●釜山大豆—

雜録

昔を今に

（口繪の繪解き）

靜義經と芳野山に相失し、鎌倉に押送せられ、賴朝の前に舞ひたりしこと、人口に膾炙する所たり。暑を避けて鎌倉に至るものは、鶴ヶ岡祠前に彼女の蹈舞したりと稱する一殿堂あるを見るべし。彼女は此時歌ひき、

　賤やしづ賤のをだまきくりかへし
　　昔を今になすよしもかな
　芳野山峰の白雪踏みわけて
　　いりにし人の跡ぞ戀しき

吾人は其征夷將軍の威權を以てして、猶彼女が思慕の意を奪ふ能はざるに取る所ありと云ふ。

時事一斑

博覽會の成果

吾人は嘗て博覽會を觀て、其著しき進步の徵候を顯はせるものが第一工業に關することにして、農業に關することと之に亞ぐとなしたりき。審査の果して申分なきや否やは之を知らずと雖、吾人は其名譽賞を得たるもの、何人なりしかを見て、とりあへず日本の爲に實業前途の多望なるを喜ばざるを得ざる也。

名譽賞（金製）

一生絲（機械製）　宮城縣　佐野製絲場

一石炭（三池炭山）　福岡縣　三池炭山鑛業人　三井三郎助

一銅（足尾銅山及附屬古河鎔銅所）　栃木縣　足尾銅山鑛業人　古河市兵衛

北海道

一北海道有珠郡拓地成蹟表　從五位勲四等男爵
静岡縣　伊達邦成
一製茶業　静岡縣茶業者
計五

名譽賞(銀製)

兵庫縣神戸市
一燐寸　大坂兵庫燐寸製造業組合聯合會
東京府
一洋紙(各種)　王子製紙株式會社
東京府
一活字　東京築地活版製造所
大坂府
一綿絲　大坂紡績株式會社
福井縣
一羽二重及組合規約　福井縣絹織物組合
岡山縣
一錦莞莚　磯崎眠龜
東京府
一天秤分銅　守谷定吉
京都府
一刺繍觀音圖　西村總左衛門
京都府

一白磁櫻花紋花瓶青華松鶴花瓶　神奈川縣　清風與平
一再製茶(四種)　兵庫縣　大谷嘉兵衛
一煎茶　埼玉縣　山本龜太郎
一競進社養蠶改良方案　群馬縣　競進社
一高山社養蠶方案并統計表　山口縣　養蠶改良高山社
一米質改良組合規定及び成蹟　山口縣　防長米改良組合取締所
一遠海漁業成蹟　山口縣　玉江浦漁業總代　藤崎幾左衛門
一食鹽　岡山縣　野崎武吉郎
一大日本農會規定及び成蹟表其他附屬書類　東京府　大日本農會
計十七

電氣時代

我邦に於ける電氣の利用は俄に其版圖を擴充せんと欲するに至れり。

京都に於ける水力電氣(すゐりよくでんき)の應用(おうよう)が好結果(かうけつくわ)なりしより、東

都に於ける電車鐵道計畫せられ、京濱間の電車鐵道着意せられ、亦那智の飛瀑を利用して大水力電氣大坂市に應用せられんとす。

思想界の二傾向

吾人が豫期したる如く、戰勝の結果は暗々裡に日本思想界に於ける二大傾向を生せんと欲するものに似たり。

所謂二大傾向とは戰勝の基礎を忠孝仁義の道念にありとするものと、泰西文明の知識にありとするものと是也。即ち一は重きを士氣の上に置き、戰勝を以て國粹發揚の成果なりとし、一は重きを文明の組織力利器等の上に置き、戰勝を以て新文明應用の成果とす。而して之が發顯の徵候として見るべきは、教育上に於ける所謂國家主義なるもの其一にして、所謂世界主義なるもの其一也。

吾人は固より武士道の氣概を向ひ、愛國の士氣を重んず。然れども同時に世界の日本人たるべき日本人は、亦必ず世界の日本人たるべき資格を具へざるべからざるを信ず。

記號外思想發表術

新文法新文字の議論は亦文學界の一問題たり。時勢と記號的思想發表術とを相伴はしめんが爲め也。

軍夫

歸朝軍夫請負者との間に紛紜あり、一の新社會問題を生ぜんとす。

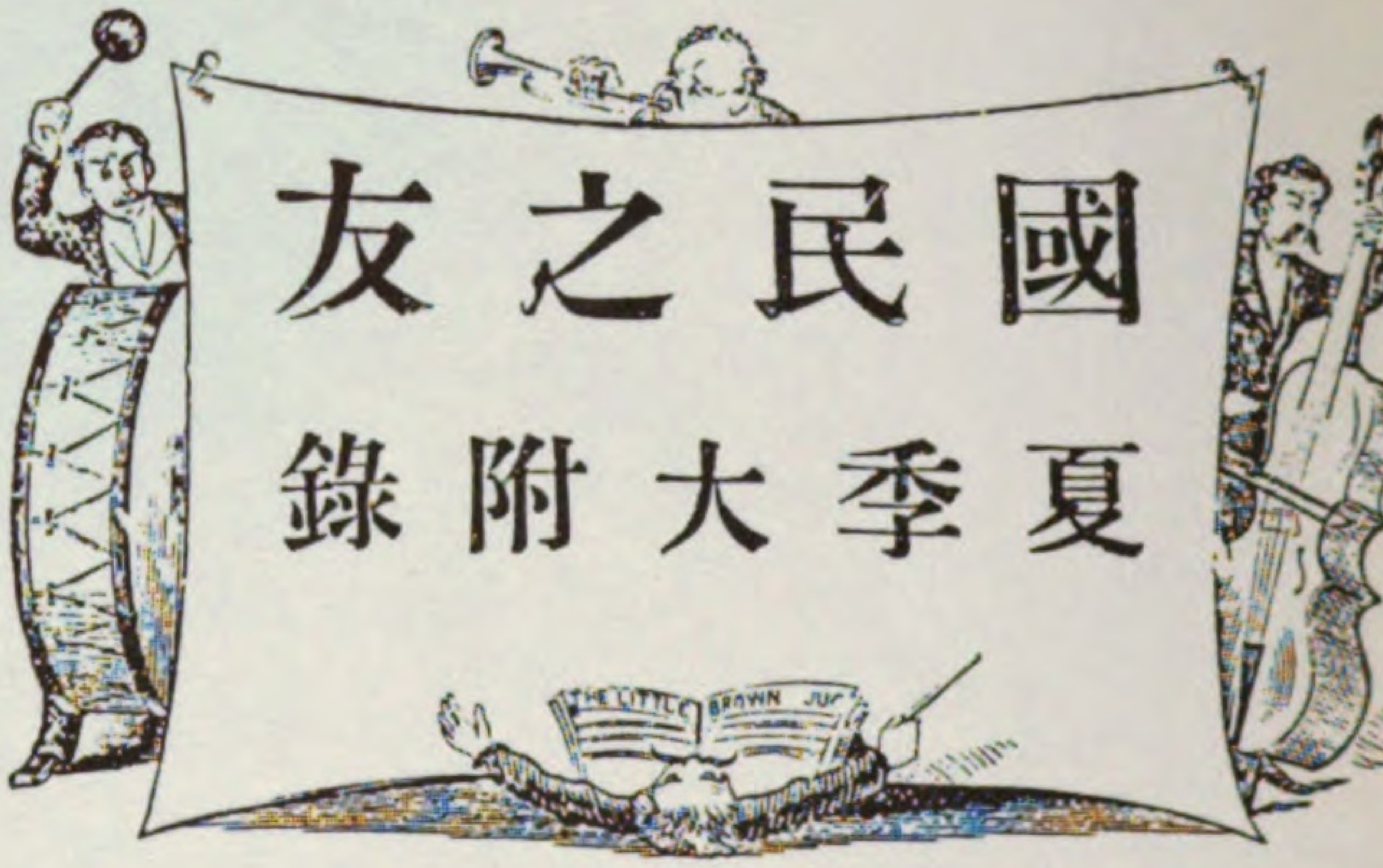
彼等が間に團結成り、又訴訟其他の手段により道理を以て事を成さんと欲するに至らば、是れ豈に一種の社會黨が漸く形つくられんと欲する道行にあらざるや。

將校の自殺

戰爭以來將校の自殺したるもの少なからず。是亦社會に於ける一の現象たらんとす。

吾人は其何事を意味するやは之を知らされども、社會の爲に之を悲まざるを得ざる也。

●八月十三日發兌



森田思軒
尾崎紅葉
小西增太郎
齋藤緑雨
川上眉山人
巖谷漣山人

讀書社會は已に戰爭文學に食傷したり。似て非なる人情小説に飽きたり沈痛悲壯の調を聽かんことを望めり此時に當て夏季大附録出づ果して此希望を滿たすことを得るや否や乞ふ八月十三日を待て

●第二百五十九號

●本號は印刷部數殊に増加するに付廣告原稿の〆切は八月七日迄とす

